ゼロの使い魔―蒼の魔法陣―

win

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロの使い魔―蒼の魔法陣―

【Ｎコード】
Ｎ１３３７Ｑ

【作者名】
ｗｉｎ

【あらすじ】
神様曰く”転生テンプレおつｗ”な状況で”ゼロ魔”の世界へ転生することになった主人公はチート能力を持って第二の人生を歩み始める。生まれた先はガリアの伯爵家三男、原作介入は難しい微妙な立場、とりあえず趣味に走った生活を目指します。

プロローグ（前書き）

このお話は作者の妄想全開でオリ主最強、ご都合主義の何でもありな作品となっています。
初めての作品ですので、誤字やおかしな表現など多々あるかと思いますが広い心でやさしくご指摘ください。
こういった作品が苦手な方はスルーしていただく方向でよろしくお願いします。
作品を書くのに非常に時間がかかるので超不定期連載となると思います。
それでは皆様よろしくお願いします。

プロローグ

そのとき自分に起きたことが分からなかった。

この少し前の記憶は猛スピードで迫ってくる列車だった。

その日は、仕事がとても忙しく徹夜状態で仕事を終わらせ、朝のラッシュの中フラフラになりながら家に帰るところだった。

乗り換え駅のホームであふれる人に押されバランス崩した所に列車が入ってきた、その後の意識は無い。

その流れで行けばまず助からないはずの状況だった。

奇跡的に助かったのか？

「ふむ、気がついたかの？　■　■■殿」

「えーと、どちらさまでしょう？」

気がつくと目の前には白髪のゆったりとしたローブを着た老人が立っていた。

「あえて名乗れば神と呼ばれる存在だ。」

「神ですか？」

どんな冗談なのか、目の前の老人は自らを神と名のった。

新手の宗教団体の教祖なのだろうか？

勧誘活動？

直前の記憶と繋がらないし、どこか奇妙だ。

「まあ、信じられないのは無理もないが紛れも無く私は神だよ。第一、周りを見たまえこんな真っ白な広い空間が現実世界にあると思うかね？」

「え？　ああ、確かに。」

なぜ今まで気がつかなかったのか、自分の周囲は真っ白な上も下も分からなくなりそうな真っ白な空間だった。

「つまり、自分は死んでここは死後の世界と思っていいのでしょうか？」

「ちょっと違うな、死後の世界へ行く前の空間と思ってくれ。君は本来あの場では死なない予定だったのだが死神が手違いを起こしおって隣の人間を死なすはずが君を死なせてしまったのだ。

このまま死後の世界へ送れば時間をかけて現世の業を洗いまた転生される。その場合今の記憶などは無い状態になる。まあ、本当に新たな人生を迎えるわけだ。

だが、それでは申し訳ないので何がしかの特典をつけてすぐに転生させることにした。

この世界での人数は君が死んだことで釣り合いが取れてしまっているので、再度この世界にすぐに生まれさせるのは難しいがほかの

世界なら転生させることは可能だ。
君の知識の中で言えば2次創作の”転生テンプレおつw”な状況だと思ってくれ。」

「ちょ！！　何ですかその説明。随分な言い方ですね。」

「まあ、君を死なせてしまったので君の記憶や知識をすべて調べさせてもらったので君に一番分かりやすい言葉を使わせてもらった。」

「はあ、そうですか」

「で転生する世界はこちらで決めさせてもらった。つい最近の記憶で”ゼロ魔の世界いいね、いってみて～”といっているのが有ったのでそこにさせてもらった。」

「ちょ！！　なんですかそれ、そりゃサイトと変わりたいとはシエスタとかタバサがかわいいとか考えましたが・・・」

「良いではないか、オタクの夢なのだろ。」

「はぁ、まあ良いです。」

「で、あと特典として何を望むかだが、とりあえずデフォルト状態では転生時期はルイズなどと同年代で貴族に転生させる。
容姿などは二枚目半で不細工にはならんが体型は自分で格好良くなるように維持してくれ。
魔法の才能に関しては特典として望むなら強くすることも可能だが望まなければ平均的な能力になる。努力すればトライアングル、普通に過ごせばライン止まり程度の才能になる。
記憶は今の記憶を保持して転生させる。当然現代知識は今現在君

が持っているもののみになる。」

「デフォルト状態でも結構優遇されてますね。」

「君の嗜好を読んでるからな、君が最低限希望しそうな部分はデフォルトにしておいた。
後は才能などで付け加えたい望みを二、三個かなえようかと思っての。
少しは自分で選べたほうが良いであろう？」

「ありがとうございます。それでしたら、魔法の才能を土のスクウェアにしてほしいのと、”１μm単位で物質や空間の把握できる目”と”元の世界の全科学技術知識”とそれを使いこなせる頭脳がほしいです。」

「それでいいのか？もっと無茶な希望がくるかと思ったぞ。」

「その力があれば自分のしたいことはできると思いますから。」

「まぁ良いじゃろ。本人が納得するならその願いをかなえよう。おぬしの転生する世界はあくまでゼロの使い魔の世界に似た世界、すべてが小説と同じではない。同じ名前、容姿、性格はしていても君と接点を持った時点で変化は生じる。皆、生きていることを忘れずにな。あと何があろうと原作の小説に影響は無いから好きに生きるといい。それでは送るぞ、達者でな。」

「分かりました、ありがとうございます。」

そうして意識は暗転した。

気がつくと何処かのベッドに寝かされて、体がよく動かない状態だった。
赤ちゃんになっているんだとすぐに理解できた。
そこに聞こえてきた言葉

「よくやったディアーヌ、元気な男の子だそうだな。」

「はい、ありがとうございます。あなた。」

「名前はすでに考えてある。アルマン、アルマン・ポーがお前の名前だ。」

抱き上げられ語りかけられる言葉。
しかし、すぐに眠くなりまた眠りに落ちてゆく。
目が覚めると女性に抱きかかえられ乳を与えられ眠るという行動を繰り返す。

しばらくすると周囲の声から両親の名前は父がフィルマン・ポー伯爵、母がディアーヌ・ポーと言い、ガリア王国の貴族だと知るのだった。

こうして僕の転生人生は始まった。

僕の生まれた家はガリア王国の南西の端でありハルケギニアの南西の端でもある場所に領地を持つポー伯爵家で王国で一番王都から離れた領地だそうだ。領地の北と東に山脈、南と西は海に挟まれ他の領地から切り離されたような地形をしているが、良質な小麦とワインが生産されているため、それを求めて商人も多くおとづれるのでそれなりに栄えた領地なのだとか。海産物も多く取れるが一番の消費地である王都へは距離の関係から鮮度をたもったまま送ることができず貿易品として成立してないのが現在の悩みの種だそうだ。

そんなポー伯爵家の家族構成は父・母・祖父・兄二人・僕の5人で祖母は僕の生まれる前の歳に病気で亡くなったそうだ。祖父は破天荒な人らしく父に爵位を譲った後は楽隠居を決め込み数人のお供とガリア国内を旅行して回っていてほとんど家に居ない。

僕そのものはチートオリ主最強って程ではないが、かなりの能力を持って生まれている。ガリア生まれで王宮から縁の遠い伯爵家の三男とあって原作に積極介入してどうこうできる立場でも地位でもないので原作どおりなら起きる戦争で死なないように立ち回って、その後は貰った能力を使って前世の夢を叶えることにしようと考えている。

前世において趣味で機械工作なんかをやっていた。ニ〇動に”作ってみた”系の動画をアップしてたりもした。夢は自作のバイクを作ることだった。せっかくやり直しがきくのだから必ずしも内燃機関である必要は無いがバイクや車のような乗り物を自作したいと考えている。

早く【錬金】の魔法が使えるようになりたいなと考えながら父さんの書斎から借りてきた本を読み漁るのだった。

第一話（前書き）

ゼロの使い魔の原作では空に浮かぶ船は”フネ”、通常の船は”船”と表記されていますが本作品では”フネ”を”空中船”、”船”は”船”もしくは”船舶”と表記しています。

第一話

「はじめましてアルマン様、本日より魔法を教えさせていただきますシドと申します。
よろしくお願いします。」

転生してから早４年、少々早いが魔法を習うことになった。魔法は使う先を誤れば初級の呪文でも人を害する力がある。それは小さい子供がいたずらで大人を殺してしまうことすら可能になるのだ。だから魔法を教える前に躾でしっかりとやって良いこと悪いことを教え、分別が付くようになったと判断されて教えてもらえるのが我が家の伝統である。

僕は生まれてすぐから確立した自我があるので言葉や文字を覚えてからは早熟すぎると周囲から訝しがられる位しっかりした行動をしていたので普通５～６才で教え始める魔法を教えても大丈夫だろうとなったのだ。

「今日は【浮遊】の魔法についてお教えします。今日までに本などで勉強されていると思いますが、魔法は魔力を感じ、それをイメージの型にはめ、詠唱とともに杖から対象に向けて放ち、効果を発動させます。そのとき、込める魔力により効果の強さが、イメージの正確さが制御の細かさになります。そして、【浮遊】は強さと制御の両方をはっきりと体感できるコモン魔法です。強さは浮かせる物の重さや高さで、制御は正確であれば一箇所から微動だにせず浮かすことが可能です。」

「はい」

「まずは、私が見本を見せます。よくご覧ください。魔力の感じ方は人それぞれですが私は目を閉じ体の中に意識を集中させます。そして心臓の音を感じ、体をめぐる血の流れを意識します。こうすることで血とともに体をめぐる力を感じることができます。それが魔力です。その魔力を手の先の杖に集め、発動させるイメージを固めながら呪文を唱えます。【浮遊】！」

すると、シドの足元に転がっていた石が音も無く浮かび上がり、僕の目の前でピタッと止まった。

「すごい。」

そのスムーズな浮遊と空中の一点で微動だにしない石を見つめ感嘆の声を上げる。

このとき、僕は神に貰ったチートの力を使って魔力の流れも見つめていた。神は力を授けるにあたりどうやらおまけをしてくれたらしい。”１μｍ単位で物質や空間の把握できる目”を与えるのにウィザーズ・ブレインのクレアヴォイアンスＮｏ．７のＩブレインをくれたようだ。これにより情報の海から正確な情報を得ることができる力を得たしＩブレインの記憶領域には”元の世界の全科学技術知識”が収められていたので希望は叶っているというより希望以上の能力だ。本来のクレアのＩブレインの応力には劣るが１μｍ単位どころか素粒子単位で物を観測できる上に自分を中心に半径５０ｋｍの空間内を知覚することができるのだ。

今のシドの実演について言えば、シドが魔力と言ったものも視えていた。体中から魔力が集まり、杖を通って石へと放出され、石を包み込むと周囲の重力制御が行われて石を中に浮かせていた。情報

制御行う魔力が拡散していくが、シドから放出され続けてる魔力が拡散した分を補い制御を維持している。

「ではやってみてください。」

「はい！」

今目の前で行われた内容を頭の中で反芻してイメージを作る。自分の中の魔力を感じ、効果をイメージして、呪文を唱える。

「【浮遊】！」

ゆっくりと足元の石が浮かび上がり、自分の杖の前でふわふわと上下しながら浮いている。シドのそれと違い一箇所に留めることができない。

「お見事です。さすがにコントールはまだまだですが、魔力の集中やイメージの構築を初めての魔法でここまでできる者はなかなかおりません。そのまま集中の続く限り【浮遊】を維持してください。」

魔力の流れは見えているがそれを思うとおりにコントロールできていない。拡散する魔力と同じだけ放出したいのだが一定にすることができない。魔力の流れを一定にすることを意識しながら【浮遊】を維持していく。

「あ！」

しばらくして集中力が切れたのか、魔力が乱れ【浮遊】の維持が切れた。

「あ～、まだ精神力はあるのに維持ができなかったよ。」

「いまので１０分位ですね、先ほども言いましたが初めての魔法でここまでできれば大したものです。今日の実技での授業はここまでにして後の時間は今の実習に関しての解説をしたあと、ほかの魔法に関する講義をいたしましょう。」

「はい」

その後１時間強講義を受け約２時間の今日の授業が終わった。

「今日の授業はここまでです。魔力のコントロールは何度も繰り返し行うことで、より正確にできるようになってゆきます。次の授業までは毎日今の石を使って【浮遊】を行ってください。そのとき、今日と同じ高さで同じ時間１０分でいいですので浮遊の上下動を抑えることを念頭に訓練してください。これを毎日5回行ってください。今日の感じからするとそこまでは精神力も持つでしょう。１０分ごとに5分以上の休憩を入れてくださいね。以上です。」

「はい、ありがとうございます。」

ちなみにシドの授業は週に1回である。彼は領内で魔法の先生をしている水のスクウェアクラスのメイジで、まだ若いが家の諸侯軍でもトップクラスの使い手だった。以前、火竜山脈から流れてきた火竜の討伐任務の際に仲間を庇い竜のブレスを足にうけ、右足の脛から下を失ったため退役したのだ。そこで魔法の教師をしているわけである。このとき足を焼かれながらブレスを吹き終わった竜の口に【水槍】を放ち止めを刺していることから”水槍”の二つ名で呼ばれている。実力があり、有名になるだけの経歴があるので人気の先生なのだ。僕は領主公子のため先生が家に来て授業をしているが

他の者は先生の家で数人ずつ一緒に授業を受けているらしい。

こんな感じで魔法の訓練が始まり週一回の講義と反復練習の日々が続いた。何しろ魔力が見える上に同じ年齢の子供とは比較にならない思考力を持っているので細かなコントロールはともかく大抵の魔法を一回見ただけで成功させることができたので周囲は天才だと喜び驚いていた。そうやって練習しているうちにこの世界の魔力がどういったものかが分かった。

目に見えていた魔力を良く観察したところ素粒子サイズの論理回路だと分かった。その論理回路がメイジのイメージとルーンによって決められた情報操作を行った結果が魔法である。言ってしまえば外付けのＩブレインを持った魔法士がこの世界のメイジなのである。この素粒子サイズの論理回路を僕は粒子論理回路と呼ぶことにしたが、メイジはこれを感じ操作する器官を脳内に持っていて魔法を使っているときには脳の一部が非常に活性化している。その部分をＭ（マジック）ブレインと何のひねりも無く呼ぶことにした。

メイジの系統に得て不得手があることに関しても幾らかの推測ができた。粒子論理回路にはいくつかの種類があるのである。魔法士で言うところの分子運動制御について言えば分子運動を下げ氷をつくるものや逆に分子運動を上げ炎を生み出すものなど単機能の粒子論理回路があり、どの粒子論理回路を操りやすいかによってその魔法使いの得意系統が決るのである。

メイジはＭブレインで粒子論理回路（魔力）にアクセス、ルーンにより命令を粒子論理回路に入力して情報制御を行っている。このときＩブレイン同様、使いすぎると過負荷によりＭブレインが使えなくなるこれが精神力切れといわれる状態だと考えている。

魔法の練習は毎日大体2時間位昼食後にやっていてそれ以外の時間は何をしているかというと、午前中は礼儀作法を身に着けるのに当てられている。一番上のクレマン兄さんなどはこのほかに国内外の貴族の紋章と名前を覚えるなどの勉強や領主として戦場に出るための戦闘訓練や戦略に関する勉強など一日中忙しくしているが、僕はまだそんな物はなく魔法の練習が終わると自由時間になる。自由時間といってもまだ自宅である城の外にはでしてもらえないので父さんの書斎で本を読むか最近は道具小屋から鑿(ノミ)や鋸(ノコギリ)を持ち出して木工作業をしている。

「アルマン様～、どこにいらっしゃいますか～」

「伯爵様がお呼びです～、出ていらしてください。」

僕を探して侍女のセリアが名前を呼びながらこっちにくる。姿が見えないときの僕がいる場所は大抵父さんの書斎か城北側にある道具小屋裏の空き地なのでやってきたのだろう。まだ少し此処にくるまで距離が有りそうなので作業を続ける。

「よしできた！。」

僕はこつこつ作ってきた物が完成したのでそう言った後でセリアに呼びかけた。

「セリア～、ここだよ～」

とりあえず道具を自作した道具箱にしまい、完成した物と一緒に

小屋の裏にまとめて置いておく。

「アルマン様やっぱり此処でしたか。何度も申し上げていますが木工作業等というものは伯爵家のご子息としてすべき事では有りませんのでおやめください。」

「いいじゃないか、僕の唯一の趣味なんだし。」

「ですから、ほかの事を趣味にしてくださいとお願いしているんです。」

「そうは言うけどこの趣味は将来的にはポー家にとっても利益をもたらすものになるだけどな～」

「もうけっこうです。とにかく伯爵様がお呼びです。そちらに参りましょう。」

「分かったよ。」

呼ばれた先は父さんの執務室だった。

「父上、アルマンです入っても宜しいでしょうか？」

「ああ、入りなさい。」

「失礼します。何か御用でしょうか。」

「先日シドから報告があった、シド以外の魔法の教師を希望してい

るそうだな？
彼は領内でも有数の魔法使いだ彼以上の使い手となれば早々呼ぶこともできん。
何が不満なのだ？」

「いえ、シド先生に不満があるわけではありません。先日の授業の折に空中船の動力に関する質問をいたしました。シド先生は魔法動力や魔法道具に関しては詳しくなく、質問に答えられないとおっしゃいました。」

ああ、そのとき、それについて学ぶにはシド先生とは別にどなたか先生を呼んでいただかなければいけないのですね？とシド先生に言ったっけ。そのことを父さんに話すと

「なるほどな。その件は分かった。ではとりあえず新たな教師に変える必要は無いのだな？」

「はい、シド先生には大変良くしていただいてます。」

「しかし、何で空中船の動力などに興味があるのだ？」

「作ってみたいものがあるのです。」

「作ってみたいもの？」

「そうです。それについてはある物を見てもらいながら説明するほうが分かりやすいので一緒に来てもらってもいいですか？」

「ああ、今なら時間も有るし良いだろう。」

そうして先ほどまでいた道具小屋に行き、完成したばかりの物を見せる。

「これは何だ？一人乗りの小さな馬車（キャビン）か？それにしてはへんな部品が付いてるが。」

僕が作ったのは小さい子供のおもちゃである木製の足漕ぎ自動車だった。【錬金】ができるようになるまでの暇つぶしで木製の操舵機構や作りたい物の模型を少しづつ作っていこうと思い作った第一号がこれだ。

「これは自分の足で漕いで動かす四輪の馬車（キャビン）です。」

実際に乗って見せながら話していく。

「今は足で漕いで動かしていますがこれを【念動】で動かすとこうなります。」

そういいペダルから足を離して【念動】を使ってみせる。そしてこの念動の部分を空中船のように風石などの魔法石で行えば馬を使わない乗り物が作れると言い、試さないと分からないが馬より速い速度で走れる可能性があることを説明した。

「こんなものを作ってどうするのだ？魔法石を使うのであればコストを考えれば今まで通り馬を使ったほうが良いと思うぞ。」

「どうするかについてはあまり考えていないです。自分で思いつき作ってみたいと考えたから見ていただきましたただの我侭です。ですが、馬よりも早く、馬よりも遠くまでいけてコストは竜や空中船より安いとなれば十分実用範囲です。軍部で十分利用が考えられる

と思います。それに豪商などにも荷車として売ることも可能でしょう。」

「馬より早く遠くにいけるか、魔法石の補給に関してはどの程度の距離を走れるか等が分かってから考えても良いか。軍用なら補給物資として別途運べばよいし商用なら大きな町で手に入れるのは難しくないか。」

「そういうことです。空中船があるのでよほどの未踏の地へ行くことを考えなければ補給は問題になりません。」

僕の答えに父さんは良いだろうと頷き、空中船の工房などで働くメイジを紹介してもらえないか聞いてみるといってくれた。

第一話（後書き）

レビテーションについて、改めてｗｉｋｉを読んだら風魔法だと表記されてましたが書き始めてしまったんでこのままコモンマジックとして扱います。ご了承ください。

第二話（前書き）

なんとか二話目が書けました。
読んでいただけると幸いです。

第二話

あれから3年がたち7歳になったけど、自動車作りの方は現在停滞中でいつ出来るかも見通しが付いていない状態だ。

理由は色々ある、空中船の動力である魔法機関の製造法について知るメイジを探してもらったが、空中船の製造は国防力に直結してるので国が保護してる上に、工房も独占している技術を伯爵家の要請とはいえ早々外部に漏らすようなことはしなかった。王宮にコネがあれば何とかなったかもしれないが、我が家は古くからそういった権謀術策を嫌い王宮に関わるのを臣下としての最低限の礼儀にとどめ権力争い巻き込まれるのを避けてきた。そのためこういった時に借りられるコネが極端に少ないのだ。

こうなると現物の空中船を購入してそれを調べるのが一番手っ取り早い方法になるのだが軍船はもちろん小型の商船でもかなりの値段がするのではいそうですかと買うわけにはいかなかった。そんなわけで最初の2年はまるで進展の無いままに過ごすことになった。その間に僕は土のラインになっていた。

そうして6歳になった頃に中古の廃船寸前の空中船を父さんが購入してくれた。僕のこずかいは当分無しの方向で話が決ったが、今の僕に町に出てお金を使うことが無いので特に不都合は無かった。船は城の中において置けなかったので外に専用のドックを作り置くことにした。

ドックは【錬金】で作った。船台を先に作っておき船を其処に置いた後に【錬金】で外壁を作ることでまかなったので費用はかからなかった。船台などに関しては空中船の購入時に一緒に見に行き寸

法を把握しておき、頭の中にある科学知識の船台を参考に空中船を支えることが出来るものを製作した。

現物の空中船を調べたところ、魔法機関は複数の魔法陣が配置された箱の中に風石を投入することで該当する魔法を発動させるものだった。

【探知】の魔法と能力を使って魔法陣を見てみたところ、魔法陣に書かれた図形やルーンの部分に魔力が込められていた。実際、魔法陣を見たまま書き写して其処に風石を置いてみたところ何も起こらず、其処に魔力を込めると魔法が発動した。そのときは魔法陣のルーンの意味などは分からないが魔法陣に魔力を込めることで風石の魔力を使い該当する魔法を発動する論理回路を形成するということなんだろうと推測できた。
ちなみに風石は空中船を此処まで運ぶときに使った残をそのまま貰ったのでかなりの量があり存分に実験が出来る。

魔法機関の中にあった魔法陣は全部で三種類で、それぞれ別々に発動させたところ【浮遊】【風の防壁】【発熱】の効果を持っていた。【風の防壁】は高い高度での気圧の低下や強風に対して船や乗員の保護をするためのもので効果範囲がマストまでいかないように調整されていた。【発熱】は【風の防壁】内の温度を一定に保つためのものだった。

各魔法陣の共通部分と大きさを意味するルーンなどを読み解き、効果範囲や効力をどうすれば制御できるか、どこを変えれば発動する魔法を変えられるかなど調べていった。

そうして現在分かっているのは、効果範囲の指定、最大出力の指定、発動する魔法の種類の指定等だ。ただし、魔法に関しては系統

魔法ならルーンをそのまま書き込めばいいのだがコモン魔法にはそもそもルーンが無いのでその魔法を示すルーンを探さなければいけない。【浮遊】のルーンから類推と過去の魔法やマジックアイテムに関する本を探して【念力】のルーンを調べてるがまだ分かっていないこれが現在の最大の問題点だ。

系統魔法の【飛行】を制御する魔法陣は作れたのでちょっとしたおもちゃを作ってみた。エウレカセブンのリフボードのようなものでボードの中央に蓋をつけて中に空洞を作り魔法陣の設置と燃料になる風石を入れることが出来るようにしたものだ。魔法陣に魔力を固定化していないのでメイジが魔力を送らないと動作しないようにして無駄に風石を使わない作りにしてある。制御はメイジがイメージを魔力とともに魔法陣に送り込むことで行う。このため平民には使えないし精神力を消費するので飛ぶだけであれば費用的に自分で【飛行】を使ったほうが良い実用には向かない代物だが空で【飛行】をオフにしてスノーボードのスピン・トリックのように回転したりすると爽快で楽しいのだ。

「ひゃっほー」

今日は気分が乗らず研究に集中できなかったので久々にフライボード（ネーミングセンスが無いがそのままの名前をつけた）を使って遊んでいる。まだ年齢が低く城の外に出ることを許されていないので城の中庭や自分の住んでる奥棟の上だけだけど飛び回れるのはかなり楽しい。

「アルマーン」

下から大きな声で呼ばれたので確認をするとすぐ上の兄ユベールが手を振っていた。

「ユベール兄さんなんですか～」

兄さんに向けて錐揉み急降下で落ちてゆく。地上数メイルの所でボードをコントロールして兄さんの前にピタリと止まって見せる。

「アルマン、そのボードで俺も遊びたいからかしてくれ。」

「またですか？ユベール兄さんはいつもこれで遊びだすとやって来てそう言いますよね。」

「だってお前は自分が使わないときは絶対にボードを貸してくれないじゃないか！」

「風石は実験に必要ですからそんなに遊びで消費するわけにいかないんです。風石を兄さんが自分で使う分は用意できるなら貸しますよ。」

「そんなの無理に決ってるだろ！買える訳が無いじゃないか。」

「兄さん達が貰っている月の小遣いを使えばこれを飛ばすのに必要な風石なんて手に入りますよ。飛行船や風石を持っていることになってますが、それと交換に僕はリュテス魔法学院に入れるような年齢になるまでお小遣い無しですから。」

「分かったよ、次からは自分で風石を用意するから俺にもこのフライボードを作ってくれよ。」

「良いですよ、作るのに2・3日時間をくださいね。」

「ああ、あと今日はこれを借りてもいいか？」

「ええ、良いですよ。これからボードを作り始めますので今日はもう使わないですよ。石の効果が切れたら終わりにしてくださいよ。墜落には気をつけて。」

「ああ、分かってる。それとありがとうな。」

よし、がんばって作りますか。自分の持っているフライボードを作ってみていくつか不満に思っている部分を修正しながら作ることにする。まず今はボードの中央上部が蓋になっていて大きく開くため派手な機動をするとボードの厚みの関係で止め具の強度が低いのか蓋がバタつく感じがするのと剛性が足りないのかボードが大きくシナル感じが有るので【固定化】や【硬化】が掛けてあるとはいえ使用中に分解する不安があった。また蓋があるため足をボードとつなぐ金具の位置も自分の理想からすると少々後ろに有るのでそれも含め改良することにした。

まずボードに設置する魔法陣をユニット化するため正方形のボードに入る厚みの金属の箱を作った。これは風石を入れるタンクでも有る。ユニットの挿入方法はボードの側面に開口部を作り其処から入れるようにした。足を固定する金具の位置は自由に決められるようになった。また蓋も側面に持ってきたことで開口部の面積が減らすとともに止め具も十分な強度のあるものを仕込める空間を作ることが出来た。

こうして出来たボードを約束とおりユベール兄さんにあげると一番上の兄クレマン兄さんも同じようにほしいと言って来たのでユベール兄さんと同じ条件でボードをあげた。

そんなことが有ってから暫くは今までと同じで、勉強をしたり研

究をしたりの日々が続いていた。

「アルマン様、伯爵様がお呼びだそうです。」

午前中の勉強が終わって、研究のために空中船の所に向かおうとしていたところセリアが僕を呼びに来た。

「父上が？分かったよ、すぐに行く準備をするよ。」

「はい。」

現在執務室にいるそうなので準備をして父さんのところへすぐに向かった。

「アルマン来たか。」

「父上お呼びでしょうか？」

「ああ、お前の作ったフライボードか、あれを先日来ていたカルカソンヌ伯が見てな伯の息子にもほしいのでどこで手に入れたのか聞いてきたんだ。あれは一番下の息子が作った物だと教えたら、お礼はするので是非作ってもらえないかと言ってきおってな。知らぬ中ではないので送ってやりたいのだがどうだ。」

どうやら作ると返事はしていないが、知り合いの頼みなので無碍にはしたくないという所らしい。

「父上、あれを作るのはそう難しいことでは無いのでカルカソンヌ伯に差し上げるのは問題ありませんすぐに作りますよ。」

「それとな領軍方からフライボードを幾つか配備できないかと上申が来ている。」

「領軍からですか？アレは軍隊で運用できるほど出来の良いものでは無いと思いますが。」

「お前はそう言うが、１・２時間程度とはいえ術者本人の出せるスピード以上の速さで飛べるマジックアイテムだ運用の費用も１個当たりは子供の小遣いで足りる程度の風石で動かせる。しかも生産は容易とくれば運用の検討をするのに十分なものだぞ。」

「父上が有用とお考えなのでしたら問題ありません。フライボードは実は作るだけなら魔法を必要としません。強度の関係から【固定化】【硬化】を掛ける必要はありますが、外側の板は木を【錬金】で成型しているだけですし、決った内容の魔法陣を羊皮紙に書き込み風石を入れる箱に貼り付けるだけで出来ます。ですので平民の職人にフライボードを作らせることすら可能です。」

父さんはこれには驚いた顔をして絶句していた。

「まて、では魔法陣の内容を誰かに知られれば他所でもいくらでも作れるということか。」

「はい、もっとも以前お話したとおり魔力をボードに込めないと使えませんし、使用中は精神力を消費しますのでそんなに需要があるとは思えませんでしたが、軍で利用を考えるとなると勝手が違ってきますね。」

「そうだな、実用になるか未知数だが有効となれば王家への届出も必要になろう。また、それなりの収入源にもなりえるので出来れば

機密として当家で生産、販売を管理したいところだ。」

「作ったのは私で、まだ3本しか存在しません。カルカソンヌ伯に差し上げても4本です。兄さんたちのものは魔法陣を見ることが可能になっていますが、風石を入れる鉄箱の底板に直に魔法陣を刻んで有りますのでその上から鉄の板を被せて錬金でつないでしまえば見ることは出来なくなります。今あるものも含めてその加工はしておきます。」

それから量産方法と出力や飛行できる航続距離に関する実験方法などとともに自分が考えて却下した軍事的運用方法と却下した理由などを簡単に述べた。

父さんはこれを聞くと呆れたような顔とともにため息をはき言葉をついだ。

「お前は本当に7歳とは思えんな、まさか量産方法や軍事運用についてもすでに考えた上でアレをおもちゃとして使っていたとわな。運用コストに時間、既存の方法との比較、デメリットに対する評価が厳しすぎるようだがそれが子供のおもちゃと評価した原因か。

とりあえず王家には新しく作ったマジックアイテムとして今のうちに数本献上して様子見しておこう。当家が作った物であることが認められれば販売・製造の保護に関しては反応を見て決められる。軍事利用に関しては検討結果次第で報告だな。

とりあえず軍に配備する分も含めお前が作ってくれ。」

「分かりました。カルカソンヌ伯の分を含めて30本ほど作りますので、配備と献上の分配は父上のほうでお決めください。塗装に関しても手配いただけると助かります。塗装なしでしたら明日中には数を用意できます。」

僕は塗装や分配の手配についての了承を貰い、気分転換に作ったおもちゃのはずが随分話が大きくなってしまったなと考えつつ父さんの書斎を後にした。

第二話（後書き）

会話の文がすごい硬い、大人びた子供の口調って動表現すればいいのやら・・・

今後も大人相手の場合こんな会話分になりそうです。

第三話（前書き）

さて今回は原作キャラが登場します。
話し方なんかが安定しないのは作者がヘボな所為なのでどうかご容赦願います。

第三話

フライボード献上の話をしてから数ヶ月、僕は今王都リュティスにあるプチ・トロワにいる。

今日はガリア第一王子ジョセフ殿下の息女イザベラ姫の８歳の誕生記念パーティーが開催されていて、僕もそこに参加している。本来なら僕の年齢でこのようなパーティーに参加できる年齢ではないのだが、どうやら青髭王子があのボードをすっかり気に入り発明者をパーティーへの招待にかこつけて連れてくるようにと言ってきたらしい。

今回のパーティーにはもともとクレマン兄さんが参加することが決っていたため、僕が王都に行くことが決ったときに、ユベール兄さんが自分だけ行けない事に拗ねごねたので家族全員で王都観光もかねて来ることになった。パーティ参加に関してもごねてたみたいだが、まだマナーも全部覚えていないのと年齢を理由に却下されていた。

そんなわけで今目の前には青髭美形のおっさんと青髪ロングのオデコ美幼女がいたりします。

「ジョセフ殿下本日はお招きいただきありがとうございます。フィルマン・ポーでございます。イザベラ姫殿下の誕生日おめでとうございます。こっちが嫡男のクレマンです。」

「はじめましてクレマン・ポーです、初めてお目通りがかないました。よろしくお願いいたします。イザベラ姫殿下誕生日おめでとうございます。お祝いの品ですお受け取りください。」

兄さんは緊張した面持ちで挨拶をしていた。

「それと、その後ろにいるのが三男のアルマンです。お声掛けいただきましたフライボードを作った息子にございます。」

「アルマン・ポーにございます。お呼びいただきありがとうございます。イザベラ姫殿下誕生日おめでとうございます。よろしくお願いいたします。」

まあそういう僕もすごい緊張をしているんでこんな挨拶がやっとだ。何しろ無能者だなんだと言われていても将来には周辺国を手玉にとって陰謀を為し自身の破滅願望で最後は自決するけどほぼ目的を達成した天才だ。目を付けられるとどんなことになるか分からない。もっとも此処に呼ばれて直接会ってる時点でダメという気もするけど気にしない。そんな人と会ってるのだ緊張しないほうがおかしいのだ。

「ポー伯爵遠いところを良く来てくれた。どちらもなかなか確りした子息だな。あのおもちゃを作ったのは伯爵の子息とは聞いていたが見たところイザベラほとんど変わらない年齢だとは思わなかったぞ、驚かされたわ。」

わっはっはと大きく笑うジョセフ殿下、原作のアンリアッタも芝居がかっていたけどこの人もなんか芝居がかっているよな。狂う前からこの辺は変わらないのかな？

「お褒めに預かり恐悦至極にございます。」

「今日はゆっくり楽しんでいってくれ、イザベラも疲れたであろう少し休憩するといい、アルマンといったかその間相手をしてやって

くれ、あまり歳の近いものもいないから丁度良かろう？伯爵もかまわないな？」

父さんはその言葉に返事をしながら頷き、僕に言葉を促した。こうなるとお相手をするしかない。

「はい、私でよろしければお相手いたします。イザベラ姫殿下お相手をさせていただけますでしょうか？」

にっこり微笑みながら話しかける。

「いいわ、あっちのテラスで休みましょう！」

照れてるのか真っ赤になって、そっぽを向いてテラスの有る窓のほうへ行ってしまった。僕は父さんに一言言いイザベラ姫について行くことにする。父さんからは時間になったら迎えに来るといわれたので適当に過ごしてれば大丈夫だ。もとより今日は兄さんの社交界デビューの日だったのだ。僕がいきなり呼ばれたから色々ややこしくなったがジョセフ殿下に会わせたことで一応の義務は果たしたので本来の目的に戻ってゆく。子供二人をほっていって良いのか保護者ｰ ｓとも思うけど父さんには僕が信用されていると思っておこう。ジョセフ殿下はちょっと分からないけど。

「ああ、姫殿下こちらでしたか。」

先に行ったイザベラ姫に追いつき声を掛ける。彼女はテラスに有ったテーブルに腰掛け給仕からティーカップを受け取っていた。

「アルマンで良かったよね？名前、一緒の席に着くことを許すわ。そこに座って。それと私のことはイザベラと呼んで。」

一応公式の場なので彼女の許し無く同じテーブルに着く事なんて出来ないのを彼女も分かっているので精一杯背伸びして着席を促してくれた。

「ありがとうございます。それでは失礼します。流石に呼び捨ては出来ませんのでイザベラ姫と。」

「それでいいわ。あなた、あのフライボードを発明したって本当？同い年なんでしょ？なんでそんなことできるの？」

興味津々に体を乗り出して僕に矢継ぎ早に質問を浴びせてくる。

「あー、私に予定は有りませんので姫殿下の望む限りお相手いたしますので落ち着いてゆっくり話しましょう。」

そう言いながら彼女の問いに答えてゆく。自分は先ほど言ったとおり同じ年代で少し年下であること、ボードを作ったのは確かに自分であること、ある物を作りたくて空中船の魔法機関を研究してその副産物としてボードが出来上がった事などを話す。

「ねえ、貴方は魔法も得意なんでしょ？そんなことが出来るなら。」

イザベラ姫は少し寂しそうに俯きながらそんなことを聞いてきた。

「ええ、私は土のトライアングルです。でもメイジとしての階位がどの程度かなんてあまり意味ないですよ。」

「なによそれ、それは謙遜？それとも自慢なの？シャルル叔父様がトライアングルになったのより早いんじゃない？それでどうしてそ

んなに平然としているの？普通もっと自慢とかしてるものじゃない？もっと大人でも自分はトライアングルだスクウェアだって自慢してるし、三つ下のエレーヌがもう私より魔法が上手だとか、お父様が魔法の使えない無能者だって馬鹿にして、私だって一所懸命やってるのにいまだにドット魔法どころかコモン魔法も満足に使えなくて・・・・・・」

なんだか、イザベラ姫の地雷を踏んでしまったらしい。本人も何を言ってるのか良く分かっていない感じだ。こんな頃からすでにコンプレックスがくすぶっているのか。原作を読む限りでは小さい頃は仲が良かったように感じてたんだけどな。タバサにも思うところが結構あるんだな、喋ってるうちにだんだん感情が高ぶってきたって感じか今にも泣いてしまいそうだ。そんな彼女の頭にポンと手を乗せなでる。

「姫様、今トライアングルの私が言っても説得力が有りませんがよく聞いてください。今私はトライアングルですが将来私が大人になったときにもそのままだった場合、同い年にスクウェアのメイジがいたらその人のほうが偉いという事になりますよね？」

「そうね。」

「では、そのメイジが何がしかの犯罪を犯し逃亡生活の末６０歳で亡くなったとしましょう。その６０歳のとき私はトライアングルのままですが大過なく過ごしましたが特に何も成さずに死んだとします。そして同じく６０歳でラインメイジが王様を庇い暗殺の矢に当たり死にました。この場合誰が偉い人になりますか？」

「そんなのラインメイジに決まってる。」

「どうしてですか？メイジの階位で偉いかどうかが決るなら、どんな経緯であれ同じ歳のときにスクウェアとトライアングルやラインと比べればスクウェアが偉くなりますよ。」

「え、だって犯罪者が偉い分けないじゃない。それに王を庇って死んだメイジは忠義を尽くしたことになるけど貴方は何も成さすに死んだんでしょ？」

「そうです、どんなにすごい素質が有るメイジでも、それを正しく使えなければ意味がありません。それに先ほどの例の様に今トライアングルでもこの先伸びす大人になればただのトライアングルメイジです。ほら今がどうなのかはそんなに関係ないですよね。それに魔法が使えるかでは無くそれで何を成したかが一番大切になるんですよ。」

こんなことをチート能力を貰っている僕が言う資格は無いんだけど、流石に目の前で泣きそうな美少女に何とか笑ってもらいたいとは思うんだよな～。

「そう言われると確かにそうね、でもならなぜ今お父様を私も皆に馬鹿にされ陰口を言われるの？」

「それに関しては国の成り立ちによるところが大きいのでしょう。」

「成り立ち？」

何しろ、この国やアルビオン・トリステインに限らずブリミルにより魔法がもたらされ魔法で外敵を撃退することで安全が確保され人々の暮らしが安定したのは事実だ。そして古い時代王は自らが魔法を持って兵の先頭に立ち戦い民を守ったと言われている。国が大

きくなって臣下を正しく掌握し指示を出すことで国を守り富ますのが王の役割になって魔法を使う必要がなくなっても王には強力な魔法の才能を求めてしまうのだと説明した。

「それと、魔法が便利で強力であるため魔法が有れば何でも出来る、魔法を持つ貴族は偉い、魔法の上手いものが偉いといった勘違いになり今のような状態があるんだと思います。でもこういった勘違いをしている人間はイザベラ姫を侮り馬鹿にして近づいてきますが、それを前提に相手をすれば逆に手玉に取ることも簡単になります。魔法よりも人を使うのに必要なことを今から学ぶ方が重要になると思いますよ。」

「貴方、すごい考え方をするのね。」

「そうですか？貴族が何をしなければいけないかを考えると自然と考え付きますよ。」

「貴方の言った考え方をすれば悔しくなくなるかも。」

その後はリュティスで今人気のお菓子の話や家の領地の話などたわいも無い話をすることになった。

「ねえ、アルマン貴方こっちにフライボードを持ってきている？私まだアレを使ったことが無いの、お父様が使ってるのを見て何度かお願いしてみたんだけどダメだって言われて。」

「今回、こちらでは使う時間が無いと思いましたから持って来ていません。あれはコントロールを失ったら墜落を防ぐような措置がしてないので咄嗟に【浮遊】がかけられない人には使わせないようにお願いしてあったので其の所為かと思います。」

それよりもジョセフ殿下がフライボードを使えるってことは魔力のコントロールとイメージ伝達は出来ているんだ。それでも魔法が使えないってなってるならルイズと同じで別の現象に置き換わってるんだろうな僕は虚無だと知ってるから驚かないけど、他の人はあのアイテムを使えることに疑問を抱かないのかな？普通のマジックアイテムだと平民でも使えるから疑問視しないのか？

「アルマン！聞いてるの？アルマン！」

「ああっ、イザベラ姫どうされました？」

「貴方いきなり黙って、私が何か言っても返事をしなくなったから。」

ほほを膨らまし怒った顔を見せながら言ってきた。

「すみません、ジョセフ殿下がフライボードを使えたと聞いてちょっと考えていました。」

「なに？お父様があれを使えるのが変なの？」

「先ほど姫様は殿下が魔法を使えないとおっしゃいました。あのボードは魔法が使えない人が乗っても動かないように出来ている、というか魔法が使えなくても使えるように作れなかったというのが正しいのですが。」

「なによそれ。」

イザベラ姫はバカにされていると考えたのか、怒ったような顔を

して乗り出して来た。

「これを説明するにはちょっとつまらない魔法のお勉強をすることになりますが宜しいですか？」

「いいわ、説明して。これで聞かないと気になるもの。」

「えー、魔法を使うには”ルーンの詠唱””イメージの伝達””魔力の放出と制御”の三つの必要要素が有ります。”魔力の放出と制御”を一つの要素としたのは放出までで魔法が成立するものと、その後持続的に制御を必要とするものがあるからです。そしてこの三つ要素のうちどれかが失敗すると魔法は使えません。」

「ええ、それは私も魔法を習う最初の授業で聞いたわ。」

この辺は理解しているとなると彼女が上手くいかないのは”イメージの伝達””魔力の放出と制御”のどっちかなんだろうな、”魔力の放出と制御”なら何とか教えられるけど”イメージの伝達”だったら難しいな、なんて考えながら話を続けていく。

「では、ジョセフ殿下が魔法を使えないとされている原因はどれかを考えて見ましょう。”ルーンの詠唱”に関しては小さい子供のうちなら有りますが現在では無いかと存じ上げます。そうなると”イメージの伝達””魔力の放出と制御”のどちらかが出来ていないことになります。これを他人が矯正することは困難で自分で正しい方法を見つけるしか有りません。

そこで問題のボード関してですが、あのボードは内部にある魔法陣は魔力が与えられると起動し風石の力をくみ出してフライを発動します。其のとき魔力とともに伝えられるイメージによって制御され使用者の思うとおりに飛びます。」

「それじゃあもしかして・・・・・・」

「はい、”イメージの伝達””魔力の放出と制御”が出来ないものには使用できない。さきほどいったあのボードは魔法が使えない人が乗っても動かないように出来ているの意味です。あれが使えるのであれば”イメージの伝達””魔力の放出と制御”が出来ているはずなのです。とすればジョセフ殿下は”ルーンの詠唱””イメージの伝達””魔力の放出と制御”の全てが正しく出来てるのに何故か魔法が発動しない状態になっているということです。この原因を突き止めればジョセフ殿下は魔法を使えるようになるはずです。」

「ほう、なにやら面白い話をしているな俺も聞かせてもらおうか。」

「え！」

「お、お父様！」

すぐ横にはいつの間にかなんというか面白いものを見つけた子供の表情というか、非常に怖い笑みを浮かべたジョセフ殿下が来ていた。

第三話（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。

髭の王様ジョセフ王とオデコ姫イザベラ姫が登場です。
この時点ではまだ王様になってないのでジョセフは髭の王子様wです。
この作品ではイザベラ様がヒロインになる予定です。

ジョセフが主人公とどんな話をするのかあまり考え付いてなかったりします。
虚無に関してすぐに話すか、それともも少し時間を空けるかも考え中です。

感想やこうしたら良い等のご提案がいただけたらうれしいです。

第四話

「ほう、なにやら面白い話をしているな俺も聞かせてもらおうか。」

気が付かないうちにジョセフ殿下がすぐ横で僕の話を聞いていました。これはかなりまずい状況ではないでしょうか？神様ヘルプ！と言いたいです。

「と言いたいところだがな、今日はもう時間だ。パーティーが終わるのでなイザベラを迎えに来たのだ。」

ひとしきり驚いた後、残念そうにしながらイザベラ姫は席を立ちジョセフ殿下の横に並んだ。

良かった、これなら後は特に会う予定もないし有耶無耶に出来る。

「だから明日迎えをやるからここにもう一度来い。なに、お前の保護者にも了解はとってやる安心しろ。

丁度良いあそこにお前の迎えも来ておる。」

「ちょっ、まっ」

もうその言葉にてんぱって何も言えずただうろたえてる内に父さん達もこちらにやって来た。

「ポー伯爵丁度良いところに来たな。」

「これは殿下、家のアルマンが何か不手際でもいたしましたか？アルマンも何を慌てている殿下の前だぞ確りしろ。」

「は、はい。」

返事をして姿勢をただし、失礼にならないよう小さく深呼吸して落ち着く努力をしてみる。しかし、どこから聞かれていたのか、完全に興味をもたれたみたいだ。殿下から明日も来るように言われた以上よほどの理由が無い限り否は無い。腹をくくるしかないだろう。

「何、イザベラを迎えに着てみたら大層楽しげに話しているようだったのでな。イザベラとここまで打ち解けた同世代の者は今までいなかったのでな、明日もよければ相手をしてもらおうと思っておった所に伯爵が丁度きたというわけだ。まあ、卿の息子は俺が直接迎えに来ていきなり声をかけたので吃驚して慌ててしまったようだがな。」

心底楽しそうな笑顔で父さんに語るジョセフ殿下、イザベラ姫はいきなり出汁にされて吃驚しているが特に何も言わず少し嬉しそうな感じだ。

「そうでしたか、分かりましたお召しと有れば私どもに否は有りません。大変光栄であります。」

まあ、そう答えるよな。

「そっちで馬車を立ててくると、門を入るときに時間もかかるだろうから、俺のほうで迎えをよこすのでそれに乗ってくるといい。世話は確りするから供もつけなくて良いぞアルマンだけ乗せればよい。」

「仰せのままに、私どもは王都に別宅を持ちませんので城下の宿”

女神の天秤亭”に逗留いたしております。」

「では、明日よろしく頼むぞ。」

そういってジョセフ殿下は宮殿の奥へ向かって歩いていった。僕や父さんたちはお辞儀をしてそれを見送ったあと宮殿を後にするため馬車へ乗り込んだ。

その後は、馬車の中で何があったかを聞かれたが、ジョセフ殿下にどこから聞かれていたか分からないし話した内容で魔法に関わる部分に関しては兄さんや母さんに聞かれると不味いような気がしたので適当にぼかして説明した。

今回王都で過ごすにあたり借りた部屋は、宿の最高級の部屋で1フロアが丸々1室になっていてその中に複数の寝室と応接室やリビングさらには従者の控え室まである現代で言うとロイヤルスイートルームに当たる部屋だった。パーティーから戻ってすぐに父さんに呼ばれ応接室で明日のことについて話すこととなった。

今日のパーティーはイザベラ姫の誕生パーティーで主役が子供のため昼餐として行われたのでまだ外は明るく母さんとクレマン兄さんは近くにある商店を見に出かけた。ユベール兄さんはパーティーに出れない替わりに朝から観光に出かける許可を貰って出かけまだ帰って来ていないようだ。そんなわけで今は父さんと二人きりになっている。

「さてアルマン、プチ・トロワで何があった。本当の所を話してみろ。ディアーヌやクレマンに聞かせられない何かがあったんだろ。」

「分かってしまいましたか？一応隠せたかな～と思ったんですが。」

「そんな訳有るか、態度で丸分かりだったぞ。もし本気で隠そうとするなら相手を伺う態度も変えないと意味が無いぞ。話をするときに二人に不自然に目をやっていたからな何かあると直ぐに思ったぞ。」

ああ、母さんと兄さんを伺うように目を動かしてることで気が付かれたのか、その辺はやっぱりダメダな。ポーカーフェイスが出来ないや。

「ディアーヌも何か気が付いたからクレマンを誘って出かけたのだろう。流石にクレマンは気が付いていないようだが。」

「そうですか、では折角のお気遣いですので戻ってこられる前に話を終わらせましょう。その前に一応【探知】と【消音】の魔法をかけていただけますか？」

そこまで警戒する僕に父さんは怪訝な顔をしながらも魔法をかけてくれた。それを確認した後で僕はあの場であった内容を全て話した。イザベラ姫の魔法に対するコンプレックスとジョセフ殿下が魔法を使えないのにフライボードを使えることを聞いた件、そこからジョセフ殿下が魔法を使えない原因が普通と違うという推測をして、それを殿下に聞かれたらしいと。

「な、すると明日、プチ・トロワに呼ばれた理由はその話を詳しく聞くためか。」

「はい、表向きイザベラ姫の相手となれば誰も気にしません。将来の婚約者候補に名前が上る可能性が出ますので厄介ごとがやってくる可能性がありますが、まあ今の年齢なら特に問題も無いでしょうし、父さんも断りようの無いお話ですからね。」

あれが直接ジョセフ殿下が聞きたいことがあるからなどと言われれば父さんも躊躇っていたはずだ。

「そうだな、その辺は流石にジョセフ殿下はそつが無い、あの王宮の中にあって無能と言われながらも配下を掌握してそれなりの政治的な功績を上げておられるからな。

それで、理由については如何なのだ見当は付いてるのか？」

「いえ、第一私は殿下が魔法を使うところを見ていません、現状ではこの推論すら正しいか分かりませんから。」

この言葉を聞きながら父さんがじっと僕を見つめてくる。実際は如何してかを知っているが、これを話すのは今までのないよう以上に躊躇われる。

「アルマン惚けるのは止めておけ、お前は正直すぎるのだろうな歳に似合わない理解力と発想力があるが政治には向かないらしい。なにか有るのだろう原因として考えられることが。」

そんなに顔に出ますか？ホント嫌になる。額に手をあてうな垂れながら答える。

「そんなに顔に出たましたか、今は特に不自然なことはしなかったと思ったのですが。」

「やはり有ったか、なに”かまをかけた”だけだ。こんなのに引っかかるようでは本当にダメだな。では、話してみろ」

「それは無いですよ父さん。分かりました！お話します。でもそん

なに難しい推論ではないのです。まずジョセフ殿下は王族で系統魔法は全て使えない、でも魔力の制御もイメージの伝達も出来ている。ならば残る系統は一つ”虚無”です。」

これを聞いた父さんは驚愕の表情を貼り付け、顔色が青くなっていく。

「系統魔法のメイジでも一つの系統に特化したメイジは対立する系統の魔法が苦手になりドットクラスの魔法でも余計に魔力を消耗したり、成功する確立が低くなったりすることがあります。ならば”虚無”に特化したメイジであった場合、系統魔法が使えなかったとしてもおかしく有りません。」

「た、たしかにお前の言う通りだが、なるほどお前が話すのを躊躇するわけだ。そんな言葉がお前の口から公の場で出ていたら、当家は権力争いの真っ只中に単身で乗り込んで行くことになる所だった。聞くのではなかったと後悔しているぞ。」

まあ、そうですよね。伯爵家の子息が継承権第一位とはいえ、まだ継承者指名を受けていない王子に向かって”貴方は始祖と同じ系統の可能性があります。”なんて言えば貴方が次期国王にふさわしいですと言っているようなものだ。取りも直さず伯爵家はジョセフ殿下を支援しますと宣言すると変わらなくなる。しかも家は古い家柄ではあるが王宮とのかかわりは低く、宮廷内での権力闘争に巻き込まれれば後ろ盾になるような伝は無いので、変な言いがかりを付けられ存亡の危機に立たされる可能性だってあるのである。

「いや、聞いておいてよかったのか。明日、殿下にお会いするのは決定事項だその上で殿下にはお前の嘘も隠し事も通用しないと見ていいだろう。そうなると、今の内容を正直に話すしかない。ならば、

今から覚悟が出来る分だけ幾らかマシだ。殿下にこの事を話したのを後から聞いたのではショックが違いすぎる。」

そう言って話をしめる。この後は父さんにお願いしてある物を購入ししてもらい。明日プチ・トロワに行くときに持ってゆく準備をした。

翌日朝早くからジョセフ殿下に会うため（表向きはイザベラ姫に会うためだけど）の仕度して迎えの馬車を待っていると来たのは黒塗りの豪華な馬車（キャリッジ）でご丁寧に王家の紋章入りだったため周囲はちょっとした騒ぎになった。これは色んな噂が飛び交うんだろうな～、これ以上面倒なことにならなければいいけど無理なんだろうな～、といった内心をひた隠し昨日用意した荷物を積んで乗り込みプチ・トロワに向かった。

宮殿に着くと案内の人が「まずはジョセフ殿下がお呼びです。」と言って先導するので素直についてゆく。そのときに持ってきた荷物を「殿下の許可があれば後で使うので」と言って預けておいた。

「アルマン・ポーよ良く来た。こっちへ来て座れ。」

殿下のいる部屋に通されると、こちらが挨拶の言葉を発する前にそんな声が飛んできた。こう言われたがこの場合形式にのっとり挨拶をしてから近づくことにしておこう。

「アルマン・ポーお召しにより参上いたしました、本日はよろしくお願いいたします。」

最敬礼をしてから示された椅子へ近づく。

「ふむ、堅苦しいな、良い皆下げてある。この部屋は誰に聞かれることも見られることも無いもう少し楽にしてよいぞ。」

フランクな感じの大げさな笑顔と身振りで接してくる。

「はい。」

そうは言っても楽になんて出来るわけが無い。

「緊張するなと言っても無駄か、まあ良い、無駄な話をして時間をつぶすのも勿体無い。随分と聡いと聞いているからな、お前ならすでに俺が何を聞きたいかは想像がついているのだろう。それについて話せ。」

次の瞬間一瞬で雰囲気が変わった。威圧感の有る”ニヤリ”という表現がピッタリの笑いを浮かべて”命令”をしてくる。その言葉に従わなくてはと思わせる力があるのだ。ああ、”王族”って言うのはこういうものかと肌で感じた。原作では狂ったような描写が多く、政治に無関心で魔法を使えない無能王といわれていたがその裏で国を過不足なく動かし、他国まで手玉に取った才能はやはりすごい。

「では確認させて頂きたいのですが、昨日はどのあたりからお聞きになられてたのでしょうか？」

「お前が『あのボードが魔法が使えなくても使えるように作れなかった』と言っていた辺りからだな。」

「では、殿下がお聞きになりたいのは『魔法が使えない特別な理由が何なのか？』ですね。」

「そうだ、普通に考えればこの程度の察しはつくか。」

「ええ、そうですね。ただ私は殿下が魔法をお使いになったところを見たことがございません。ですので昨日の推論も正しいとは言いかねるのが現状です。失礼ながら出来れば魔法を使うところを【探知】で見せていただいて確認をさせて頂きたいのですが・・・」

「別にその推論が本当に正しくなくても良い、とりあえずその推論から考えられることを話してみよ、そんな言い方をする以上何か思い当たるものが有るのだろ？」

ああ、あれはダメダこちらに何かしらの見当が有る事が分かった上で聞いてる、考え込んでいたことを素直に話してしまったために大変なことになったな。もしかして殿下は自分が”虚無”の可能性に関しても気がついてて僕の口からそれを言わせたいのか？どっちにしろ言うしか無いのは昨日父さんと話した通りだ諦めよう。

「昨日この推論を言って直ぐに浮かんだ原因が一つ有ります。呪文詠唱も魔力の制御もイメージの伝達もできていて魔法が使えない状況について考えました。ある系統に特化したメイジが相対する系統の魔法を上手く使えないのに似ています。火のメイジが水の魔法を苦手としているアレです。殿下は全ての系統を苦手としていると考えたとき、我々に始祖から与えられた系統はおのずと一つに絞られます。失われた系統”虚無”です。殿下は始祖の直系の血筋でいらっしゃいます、当然”虚無”の系統が発現されてもおかしく有りません。」

この言葉を聴いている最中殿下は俯き右手で顔を覆い肩を震わせていく。

「ククク、クックック、ワーハッハッハッハ」

あーこれは狂王フラグを早めに立ててしまったのか？やばい？俺このまま共犯とかにされる？

「なるほど、こんなに奇異（おかし）な話を聞いたのは初めてだ。魔法が使えず無能と蔑まれる俺が始祖と同じ”虚無”だと。だとしたら何故俺はこんな思いをしなければいけなかった？弟を羨み、俺を廃嫡しようとする貴族達を追い落とし・・・・・・」

なんか、すごく危険な事をおっしゃってますよこの方。俺どうなるんだ？このままだと不味そうなので声をかけるか。

「殿下？大丈夫でしょうか？」

「うむ、そうだった、お前が居たんだな。お前は俺がこうなるのを予想して話すのを躊躇っていたのか？」

いきなり元に戻って随分と鋭いツッコミをしてくる。実際、これも怖かったけどそれよりももっともな理由があるのでそっちを話す。

「いえ、流石に殿下がこのように取り乱されるとは思っていませんでした。おおよそ同じような結論に達していて私から言わせたかったのだと思っておりましたから。私が躊躇った理由は、この話をどのような場所であれ経緯であれ発した場合、当家が殿下が次期国王だと言っていることに成るからです。王位殿下は継承権第一位ではありますがまだ正式に指名を受けておられません。そこでこの様な発言するのは控えるべきと思っておりました。」

「ポー家は俺が王になるのに不満が有るという事か？シャルルこそ王にふさわしいと？」

先ほどの狂気を張り付かせた顔をこちらに向けてくる。

「いえ、次期国王の指名は現国王の権利です。一地方領主の口を出す問題では有りません。そこに口を出すなど恐れ多いことだという意味です。また、王宮の権力闘争より遠い当家ではこの発言で新たに擦り寄る一派とされれば追い落とされ没落する危険すら出てきます。そういったことを避けたいのです。」

「王については国王の指名に従うと？どちらが王であっても構わないというのか？」

「言ってしまえばその通りです。当家にとってジョセフ殿下もシャルル殿下も王族であり直系男子であることは変わり有りません。であればどちらが王座に付かれても貴族の義務として国に尽くし臣民を守るのみです。」

「なんとも正直な話よな。本人を前にお世辞の一つも無くどちらでも同じと言ってくるか。」

「言葉が過ぎたことはお許しくださ。」

「よい、しかしイザベラと同じ歳とは思えんな。」

そう言った後、殿下僕には聞こえなかったが何事かをつぶやきニヤッと笑った。すっごい嫌な予感がして背筋が寒くなったがどうしようもない。

「まあいい、面白い話を聞いた。何か褒美を取らそう何かほしいものはあるか？」

「いえ、本日はイザベラ姫殿下のお相手に来たので褒美をいただくようなことはまだ何も致しておりません。ですが姫様のお相手をするにあたり本日はフライボードを持ってまいりました、宜しければプチ・トロワ上空の飛行許可を頂けると幸いです。」

言外に今の話は無いものとして他言しないと言ったつもりだけど、別の部分に食いついてきた。

「お前は昨日フライボードは持ってきて無いといってなかったか？」

「昨日、失礼させていただいた後作りました。風石さえあればアレを作るのはそう難しく有りませんから。二人乗りに改造してありますので操作は私が致します。」

「良いだろう。あれもフライボードに乗りたがっていたからな許可しよう。」

「ありがとうございます。」

「まあ今日は面白かった、今度はフライボードについてだけでなく、フライボードを作るきっかけになった物について詳しく聞かせてくれ。あはははは。」

そういったあと何かのマジックアイテムなのか音のしない鈴を振ると後ろの扉が開き従者が入ってきた。

スルーされたかと思ったけど今回の話はフライボード制作秘話を聞いたことに成ったらしい。

「ではアルマンよイザベラの相手を頼むぞ。このものをイザベラの所に案内しろ。それから彼が持ってきた荷物も一緒に持っていくように。今日の警備責任者をここに呼べ。」

「はい、それでは失礼致します。」

第四話（後書き）

さて今回はジョセフ殿下と対談でした。
いかがだったでしょうか。

ジョセフが”虚無”の可能性は話しましたが確定であることは話しませんでした。
しかし、ジョセフに目を付けられた主人公は忙しくなりそうです。

次回はイザベラ姫に会ってきゃっきゃうふふな展開になる予定？です。
次回も読んでいただけると嬉しいです。

第五話

ジョセフ殿下の下を失礼した後、僕はプチ・トロワの中庭でお茶をしていたイザベラ姫の前へと通された。

「イザベラ姫様、こんにちは。昨日のお話の通り本日もお相手をさせて頂きます。よろしくお願いします。」

「アルマン、本当に来たのね。昨日の感じからするとお父様とお話して帰るだけだと思っていたわ。」

「そんなことはしませんよ。私もイザベラ姫といるのは楽しかったですから。」

そういうと、イザベラ姫はうれしそうに笑ってくれた。いろいろコンプレックスもあって大変だろうけど今は素直で可愛い女の子なんだな〜。

「それと昨日、姫様がフライボードに乗りたいと仰っていたので本日はフライボードをお持ちいたしました。
私が操縦するボード後ろに乗っていただく形になりますが宮殿上空の飛行許可もジョセフ殿下いただきましたので警備の準備が整えば飛べると思いますよ。」

「え！本当！」

「はい、その格好のままですとスカートがまくれ上がって色々不都合がございますので宜しければ乗馬をするようなお召し物に換えられた方が宜しいかと。」

「でも、昨日こっちにボードを持ってきていないと言ってたわよね。如何したの。」

「作るのはそう難しくないので昨日宿に戻ってから作りました。パーティー中に作ることも可能でしたが風石がないと飛ばすことは出来ませんので昨日はお断りいたしましたが。」

「そうなんだ、良いわボードが着く前に着替えに行って来るわ。待っていなさいね。」

「ええ、お待ちしています。」

そういうと、踵を返しすっ飛んでいってしまった。結構お転婆なのだろうか？

あ、テラスの入り口に控えていた侍女に怒られてシュンとしてる。かわいいな～。

「すまない君がアルマン・ポー君であってるかな？」

後ろからキビキビとした声で話しかけられたので振り返るとそこには宮廷警護の近衛騎士とその従者の人がいた。フライボードは従者が持ってきたらしい。

「私は本日のプチ・トロワ警護を担当してる西花壇騎士団オリヴィエ・ラフェールだ。君とイザベラ姫殿下がこのマジックアイテムで空を飛ぶとのことで警護につくことになったよろしく頼む。」

「こちらこそ、よろしくお願いいたします。お手数をおかけして申し訳ございません。」

「本当にな！その歳でもう殿下と姫殿下にゴマすりとは見下げ果てたものだ。」

うわ～、相当嫌われてる。余計な仕事を増やしたのがまずかったのかな？殿下に取り入ろうとする屑貴族として映ってるのか、それとも両方か。しかし、こうも正面きって言ってくるってことは子供相手だとしてなめきっているって所か。

「申し訳有りません、周りのかたがたのご苦労に考えが及んでいませんでした次からは気をつけます。それで、フライボードで宮殿上空を飛びますが、姫様をお乗せするので激しい機動はとらないつもりですが万が一の場合フォローをお願いします。一応自分で【浮遊】をかけてどうにかできると考えていますが何事にも想定外のことはおきますから。」

「ふん、そんな危険なものなら最初から姫殿下をお乗せしようとするな。まあ、ジョセフ殿下の許可と命令があるので警護とフォローをするのは本より我らの職務だ確り行ってやる安心しろ。」

「ありがとうございます。」

嫌味を言われながらだが、騎士の誇りからか安全確保に関しては確りやってくれそうなのでお礼をいい頭を下げる。

「では、こちらのマジックアイテムは渡しておこう、準備を始めておけ。」

そうして、持ってきたボードを箱から出して金具や中にある風石や魔法陣の最終確認をしながらイザベラ姫がやって来るのを待った。

「アルマン、私の準備は出来たわよ。そちらは大丈夫かしら？」

その声に顔を上げると、ズボンを穿いたイザベラ姫が胸をそらせて直ぐそこに立っていた。

「姫様は何を着てもお似合いですね、大変お可愛らしいです。こちらの準備も出来ております。どうぞボードにお乗りください。」

僕の言葉に照れたのか真っ赤になって固まってる可愛い姿を楽しみながら手を引きボードへと姫を誘導する。

「乗っていただく前に注意事項があります。このボードは使用者が魔力とイメージを送ることでフライが発動します。つまり、二人乗りをした場合、二名が違うイメージを送るとコントロールが失われ墜落します。

今日のところは私が操縦を行いますので姫様は魔力を使わないでください。お願いします。」

「いいわ、約束する。」

「それと警備の皆様の手前、あまり派手でアクロバティックな動作は出来ませんのでご容赦ください。あまり派手なものをやると墜落すると思われて強制的に【浮遊】を掛けられかねないのでよろしくお願いします。」

「あれもダメ、これもダメなのね。自由に飛べないの？」

「姫様の安全の為なのでご容赦ください。」

こんな話をしながらボードの止め具を締めて足を固定していく。イザベラ姫に背を向け自分もボードに乗り、自分の止め具も締めたところで振り向き最後の注意事項を言う。

「では、飛行します。体を離した状態だとバランスを崩しやすく危険なので私の腰に確り抱きついてください。」

「えっ！、えっえー」

「姫様、良いですか？」

「分かったよ！はい、これで好い？」

「結構です。姫様に抱きついていただけるとは大変役得です。」

まあ、自分は前世も合わせると結構歳がいってる計算になるんで、このイザベラに好意を抱いたりすると”ロリコンかなのでは？”という気にもなるのだが「精神は肉体の玩具」なんて言葉のもあるのでそっち引きずられてるのか、美少女と話したりくっ付いたりで心がうきうきしてきている。

「なっなにを、はっ早く飛びなさいよ。」

そして、慌てたりうろたえたりする時のリアクションが可愛く感じてしまうためついからかってしまう。手を離して離れようとするイザベラ姫の腕を上から押さえ止めると

「はい、では。」

と言ってフライボードに魔力を込める。

ボードは音も無く浮かび上がり、前に進みながら角度を変え上昇していく。宮殿の尖塔の上に達する位まで上昇したので水平飛行に移る。しかし、イザベラ姫から全然反応が無いのでチート能力で後ろを確認すると真っ赤な顔をして目を瞑っているのが分かった。

「イザベラ姫、目を開けてみてください。」

「えっ、えっ、わぁー
すっすごいわ、私こんなに高くまで飛べないからこんな景色は初めてよ。」

「それは良かったです。如何しましょう飛べる範囲がプチ・トロワの敷地内だけですのでそんなに遠くにはいけませんがご希望に添えるように飛びますよ。」

そうしてプチ・トロワの端ギリギリで一周したり、大きく円を描いて宙返りしてみたりと一通りイザベラ姫が希望するように飛んで着陸することにした。時間にして３０分位だったが十分満足してもらえたらしい。

「たのしかった～、凄いわ私【飛行】をまだ使えないし、【浮遊】でもあそこまで高く飛べないからあんな景色は初めで嬉しかったわ。」

侍女が用意してくれた紅茶を飲みつつ来た時にイザベラ姫がついていたテーブルで雑談をする。彼女は大層フライボードでの飛行がお気に召したようでしきりにその感想を言っている。

「それに、あのボードは随分早く飛べるのね。」

「風の高位メイジだともっと速く飛ぶことも可能ですよ。早くすればその分精神力を使うのであまり距離が飛べないそうですが。ボードももっとスピードを出せますが余り早くすると乗ってるのが大変なので今日はあのスピードで留めたんです。」

「そうなの、ねえアルマン貴方は魔法が使えないことでバカにされるのは気にしなくて良いって言ってくれたけど私はやっぱり魔法を上手く使えるように成りたいわ。だって、魔法が上手く使えればあんな風景を見たり出来る。それに自分に出来ることが広がるのはいい事でしょ？」

イザベラ姫はテーブルに乗り出しながら真剣な目をして僕に問いかけてくる。

「ええ、そうですね。自分がそれをやりたいと目指すのでしたら魔法に拘るのは悪いことでは有りません。僕がマジックアイテムを作っているのもそれを作ってみたいと思ったからですから。」

「昨日聞こうとして話がそれたんだけど、あなた私と同じ歳でもうトライアングルだけど何か魔法が上手くなるコツって有るの？どんな練習をしているの？教えてくれるかしら。」

「そうですね私が毎日している練習についてお教えするとがっかりされるような気もするのですが・・・」

「なに、もしかして練習なんかしなくても上手く使えるようになったとか？」

「いえ、そうではなく習い始めから今でも続けている練習は【浮遊】の魔法を一定時間維持する練習なのです。」

「え・・・」

「ですから【浮遊】の魔法で練習をしているんですよ。最初の頃は小さな石を自分の肩位の高さに持ち上げて１０分維持するのがやっとでした。それを休憩を挟みながら5回、これは当時の自分の精神力切れギリギリの時間を先生が見極めて出した課題ですが。そうやってその石を微動だにせず維持できるようになったら重さを変えて同じ事を繰り返しました。今は大体２５０リーブルの物を３０メイルの高さで維持して３０分これを日に2回やってます。このほかに【ゴーレム生成】【錬金】といった魔法の練習もしますが自分の魔法の練習といえば【浮遊】何ですよ。」

「ねえ、それだけでトライアングルなれるものなの？」

「私の先生曰く、私には凄い才能があるんだそうです。先生は他の生徒にも同じ指導をしているそうですが私ほど早くにトライアングルになった者はいないそうです。先生の指導を受けてやり続けることが出来た人は大抵ライン以上になってるそうですよ。」

ただ課題が達成できないといつまでも同じことをやり続けるので習うのが子供だと癇癪を起こして習うのを止めてしまう事が多くて続く者が少ないことも言っておく。

「先生の受け売りですが【浮遊】は魔法の練習に一番いい呪文なんだそうです。【浮遊】は強さと制御の両方をはっきりと体感できるコモン魔法できて、強さは浮かせる物の重さや高さで、制御は浮かせた後の安定度で判別が出来るそうです。なので私の練習では高さの維持は１／１０サントでも動かずに維持することを先生から要求されます。」

イザベラ姫は凄い驚いた顔をしてこっちを見ている。

「１／１０サントも動いちゃダメって凄い厳しいのね、３０メイル上で維持って聞いたときもう少し動いても良いのかと思ってたわ。」

「自分に系統魔法の練習をする許可が出たのは、自分の体重と同じ重さの物を１メイルの高さで１時間維持できるようになったときでした。それまではずっとコモン魔法の練習のみでしたね。姫様をそれを目標に練習をされてみては如何でしょう。

その他に先生が見本を見せるときには【探知】の魔法をかけさせてもらって魔力の動きも一緒に見ると良いですし、自分が魔法を使ってるときに【探知】で見てもらって制御のばらつきを等も指摘してもらうと練習しやすいですよ。」

「わかったわ、今度の授業からその方向で出来ないか先生に相談してみるわ。」

魔法についての話はこれで終わったが、その後は僕が普段どんなことをしているかなどを聞かれた。昨日は姫様の話を聞いたり、領地の話をすることが多く僕個人の話をすることは少なかったのでそれなりに話は弾んだ。また、僕も可愛い女の子と話すことで浮かれていたのか普段話さないマジックアイテムに関するアイデアや今研究している魔法陣の問題点なども話していた。魔法陣に関しては余り理解していないようだったが、それでも一生懸命聞いてくれるのはやっぱり嬉しかった。また、魔法陣の研究に関しては魔力の制御などが確り出来ればコモン魔法しか使えなくても出来ることを教えるとさらに興味を引いたようだった。

「姫殿下そろそろお時間です。」

側に控えていた侍女が時間を知らせてきた。

「え～、もうなの？もっとお話を聞きたいわ。」

「そういって頂けるのは光栄ですが御家臣の方を困らせるのは宜しくないですよ。田舎暮らしですのでお呼びがあれば何時でもとは言えませんが、機会があれば又参上いたしますので申し訳有りませんが本日は失礼させていただきます。」

「アルマンがそう言うなら残念だけど仕方が無いわね。じゃあまた何かを発明したら絶対に知らせに来なさいよ。」

イザベラ姫は拗ねたような顔をしつつも了承の言葉をかけてくれる。僕はもう一度礼をしてその場を離れた。

その後は特にジョセフ殿下に呼ばれることも無く宮殿を送り出され逗留先の宿に帰る事になった。そうして残りの王都滞在期間中も心配した呼び出しは無く家族で観光をして過ごし家の領地へ帰ることが出来た。そして今まで通り、自動車をつくるため魔法陣の研究に明け暮れるはずだった。

あの謁見のときに話した色々なことが、僕のこれからを自分が考えた以上に大きく左右することに成る。でも、それが分かったのは領地に帰って暫くしてからだった。

第五話（後書き）

イザベラ姫と空中散歩でキャッキャ、ウフフするはずでしたがあんまり上手く表現できてないような気が・・・
自分の表現力の無さが悲しいです。

三話使って王都訪問して本人の意思とは別に原作への介入フラグがたちました。
本人の望みとは別にジョセフとイザベラに関わっていくことに成りました。
さて、主人公は無事にこの世界における自動車を開発するにはまだまだ時間がかかりそうです。

挿話　1（前書き）

今回は短めですご容赦ください。

挿話　1

―　ある王子の思案　―

最近、兄さんの様子がおかしい、いや悪いわけではないんだ異様に機嫌が良いのだ。兄さんは普段豪放磊落な振りをしているがかなり繊細で神経質だ、笑って機嫌がよさそうにしててもそうでない事が多い人なのにイザベラの誕生パーティー辺りから本当に機嫌が良いことが多い。家臣への指示の出し方や態度、公務への対応が変わったわけでは無いがそれだけは見てれば分かる。そうして公務が終わるといそいそとガリア王立魔法研究所に行き始祖の時代の魔法についてなにやら調べているらしい。魔法が一切使えず随分前に諦めていた兄さんにどんな心境の変化があったんだろうか。

同じく姪のイザベラも様子が変わった。兄と同じで魔法が得意でなくコモン魔法は使えはしているが失敗も多く、系統魔法にいたってはドットの初歩の魔法も上手く使えていない。年齢で行けば得意な系統のドットスペルであればそろそろ使えるようになる頃だ。うちのシャルロットが最近魔法を習い始めてすでに練習の内容が追いつこうとしているため、比べられかなり苛立った様子だったのにそれが無くなっている。

そして、練習の内容にも希望を出しているらしい、こっちは来ている魔法の教師に受け入れらず喧嘩をして辞めさせてしまったようだ。新しい教師役を現在探しているようだが上手くいってないのか、今は一人でひたすら【浮遊】の練習をしている。

そんな二人の変化の切欠を調べてみると一人の少年に行き当たっ

た。名前はアルマン・ポーといい、ガリアの南西の端ポー伯爵の三男で現在7歳で既に土のトライアングルに成っている天才少年だ。フネの魔法陣を研究してフライボードという新しいマジックアイテムも作り出したそうだ。どうやらイザベラの誕生パーティーの折に兄さんがその才能に興味を持ち呼んだようだ。

そしてパーティーの翌日、イザベラが少年を気に入ったからとプチ・トロワに呼び人払いまでして二人で会っていたようだ、ここで何か兄さんが変わるような話があったのだろう。その後はイザベラと例のフライボードで飛びその後はイザベラが魔法が上手くなるには如何したら好いか熱心に聞いていてらしい。今の練習に関しても彼が言った事を元にしているそうだ。そして魔法の先生として少年をプチ・トロワに呼ぼうとしている。

兄さんとイザベラは魔法に関してはかなり激しいコンプレックス抱いていた筈で、魔法の天才と呼ばれる少年に短時間で気を許したりしない性格だ。その二人がそろって彼を気に入ったのは今の態度からまず間違いないと思う。どういった少年なのか直接会って確かめる必要があるかもしれない。

僕は史上最年少でスクウェアメイジに成った天才といわれているが、天才というなら兄さんが本当の天才というに相応しいだろう。魔法を除けば何をやっても兄さんには叶わない魔法に関しても兄さんが唯一できない物だから必死にそれを練習したからに過ぎない。第一王族が魔法が得意で役に立つような世の中はとっくに終わっている実際に政治の世界に魔法が必要なのは密談のときに覗きや盗聴を調べ防ぐ時位なものである。

それでもこの世界は魔法を使えるものを優遇し、使えないものを蔑む。兄さんは正当な評価を受けることは無いのだ。なのに兄さん

はその評価すら逆手に取り、相手を手玉に取り思い通りに人を使っていく。父王は後継者の指名をいまだに行わずにいる。これは魔法を使えぬ兄に対する家臣の不満と兄の政治家としての才能を秤にかけているからだと思う。

そして僕はこの習慣を利用し、噂を流し、金を使い、自分の派閥に家臣を取り込むことで父王の天秤を此方に傾けようとしている。だから少しでも兄さんに味方する可能性のある人物は危険視する必要がある。特に才能がある人間は・・・

大体、僕より魔法が出来るだって！

そのこと自体が許せない！

兄さんに魔法以外で負けている僕が、魔法で他の誰かに負ければ僕には何の価値もなくなるじゃないか！

そうなれば僕の計画は無に帰してしまうだろう！

そんなことは許さない！

そうさ、許されるはず無いじゃないか！

たかだか辺境の伯爵の三男程度に僕の価値を否定されてたまるものか！

だから彼を此方に引き入れてみせる、出来なければ・・・・・・

そして僕は兄さんを超えてみせる・・・・・・

挿話　1（後書き）

今回はシャルルの独白です。
ジョセフもそうですが、原作開始前のシャルルも色々煮詰まってるかなと思っています。
ジョセフに追いつくために自分を高めるのではなく、相手の足を引っ張ることで何とかしようと足掻いてます。

このため、ジョセフが近づいたアルマンを自分の陣営に引き込もうと画策しています。
しかも、自分の唯一の評価箇所と思い込んでいる魔法で自分を越すかも知れないので
兄に対する以上の嫉妬と焦燥を抱いているでしょう。
挫折を知らないエリート王子は怖いです。

第六話

あのパーティーから戻り暫くは平穏な日々が続いた。魔法陣の研究に関しては最早伯爵家内にある文献ではどうにも成らないのでお金をもらえるようになったら王都へ文献を探しに行く事を計画している。そしてお金に関しては嬉しい話がある。フライボードの販売に関して問い合わせがかなり来たらしい。

王家に献上して、その結果僕が呼ばれたのであのパーティーでかなりの噂になり、しかも姫様とプチ・トロワ上空を飛んだことが決め手となったみたいだが欲しいいう貴族がそれなりに出たのだ。一応動作の仕組みなどを話し欠点である精神力と風石を消費することや墜落防止の機構が無いことなどを説明すると半分くらいは購入を止めたが残りは購入したそうだ。

量産方法とその為の道具は父さんに伝えて有り、そのための準備も出来ていたのでこれに関しては僕は手を出す必要は無かった。父さんはその売り上げの半分を研究のために買った空中船と風石の費用と相殺することで僕のお小遣いが停止する期間を短縮することにしてくれた。

ボードは一本１００エキューとマジックアイテムとしては安価で販売されることになったので最初の問い合わせ以降もそれなりに売れているので遠くない内にお小遣いをもらえるようになると思う。それまでの間は自分の魔法陣のもう一つの懸案事項である出力調整に関する研究を進めることにした。

出力の調整に関しては、空中船の魔法陣は最大の出力が決められ

ており、魔法陣周辺の魔力の濃さ（魔法陣の効果範囲内にある風石の量）で出力が決るようになっている。メイジが魔力を注ぐことで風石の代わりを出来るのもこういった仕組みのためである。

僕はフライボードのようにメイジのイメージによって行われる出力調整ではなく機械的な操作で無段階の出力制御が出来るようにしたいと考えてる。最初はバネとワイヤーで魔法陣の上をスライドする箱の中に風石を入れて風石の出し入れで出力調整をしようと思っていたんだけど、魔法陣が風石に反応する範囲がそれなりにあるためその距離をとろうとするそれなりの距離を動かせないとならず微妙な出力調整は難しいことが分かった。

電動モーターとバッテリーなどの電気回路を作り風石を入れる箱の駆動を電動化することを考えたがそれなら元から電気自動車を作ってしまったほうが早い。そうなると現状では量産は全て錬金に頼ることになるし、まずどうやってモーターやバッテリーを思いついたかを問いただされると厄介なことになるので出来るだけ回避したかった。

そんな感じで装置を作ったり、考えたりしながらパーティーから二月ほどたち僕の8歳の誕生日が近づいた頃、また父さんの書斎に呼ばれることになった。

コン、コンと書斎の扉をノックして中に声を掛ける。

「父上、アルマンです。」

「うむ、来たか。入りなさい。」

直ぐに返事があり書斎へと入った。

「こちらの部屋に呼ばれることは珍しいですが、何かありましたか？」

「ああ、アルマンお前が王都で言っていた面倒ごとがやって来たみたいだぞ。これを読んでみろ。」

そう言って渡されたのは一通の手紙だった。ただしそこに付けられた封蝋には王家の紋章が刻まれていた。

「えぇと、これは読んでも良いのでしょうか？」

読めと渡されたが流石にためらわれたので確認をしてしまった。

「ああ、お前にも関係があるし、どうせ読んで聞かせることになるからな。なら実際に読んだ方が理解も早かろう。」

「分かりました。」

そして内容を読んで絶句した。何しろイザベラ姫の魔法の先生として僕を王都に召喚する旨が書いてあったのだ。宮廷とつながりの浅い当家の立場からすれば厄介極まりない命令だった。実際のところ呼ばれている僕がまだ１０歳にも満たない子供であるためそれを理由に断っても問題ないようだが、どうやら魔法の練習方法に関して姫様が僕が言った方法で教えて欲しいと今まで教師に言ったところ鼻で笑われ聞き入れられなかった事で喧嘩になり教師を辞めさせてしまったようだ。こうなると断れると成ってはいるが断ることは出来ない、行くしかないのだろう。

条件は悪くなく、魔法の授業を教えるほかはイザベラの学友（異性が学友になるのは異例であるが）として一緒に経済や政治に関する授業を受けるようにとも書かれており、住居なども王家のほうで用意をしてくれるので従者を連れて行けば良いようである。王立魔法研究所の施設使用許可も出ており魔法陣に関する研究は家とは比較にならないくらいしやすくなるだろう。この研究を行うときにもイザベラ様に教えるように指示が来ている。イザベラ様の予定が開いてる場合可能な限り研究中に自分の下に訪れることに成ると手紙には書いてあった。

「あ～、これは行くしか有りませんね。イザベラ姫殿下に練習方法を変えてみてはと進言したのは僕ですからそれで教師と仲たがいをした以上、責任を取らないといけませんよね。」

「そうだな、選択の余地は無かろう。あと前任のメイジだったものには何か贈り物をして機嫌をとっておかねば成らないだろうな。」

しかし、どうしてこう選択の余地の無い問題ばかり起きるんだろう。問題が起きるにしてももう少し選択肢があっても良さそうなのに。

「すみません、ジョセフ殿下の派閥の方々への対応は如何しましょう？」

「そちらも知り合いを使ってどうにかしておくさ、こうなっては仕方がない。お前は家から出すことになりそうだな。将来は王宮への仕官をして身を立てることを考えるように。」

「分かっております。元よりクレマン兄さんが家を継ぐことが決っ

ていることから、魔法陣の開発が上手くいったら自分で商家でも起こして独立しようと考えていましたからそれが仕官に変わるだけです。」

「それならいい、しかし独立して商家とは随分思い切った考えだな。どこか跡取りのいない家への養子縁組も可能だし、家柄が合えば婿養子という道もあるんだぞ。」

「そっちは私ではどうにも成りませんから、とりあえず自分の能力でどうにか成りそうな方向で考えていました。」

「まあいい、まだ8歳にならないお前なら時間はまだある、結論を急ぐ必要も無いか。」

空中船は向こうに持っていけないので此方に置いていくことにして、風石も全てを持っていっても邪魔になるため一部を残し売って現金化して向こうでは必要になるつどに買うことに成った。多少損をすることに成るが向こうで現金が必要になるし保管場所に困るのも確かなので仕方が無いことだった。

王家からは教師としての賃金が月３０エキュー支払われることになっている。王族に対する教師としては非常に安価な賃金ではあるが、プチ・トロワの一角に研究スペースをかねた専用の住居を用意して食事に関しては宮殿で働く貴族の食堂で食べられるように手配するとなっており、住と食に関しては全て王家から支給される上、自分が教えるとき以外には教育を受けられるのでそれと差し引きと考えれば非常に良い条件と見ていい。

現金として５５００エキューと風石５００エキュー分が当面の生活費と研究資金となる。下級貴族の１０年分の俸給以上ではあるが

研究資金としては少々心もとない金額（風石は高価なものだし、研究用の書籍なども高額）なので無駄遣しないようにしないといけないな。

従者としてついていくのはセリアの他に侍女が2人と馬丁と御者を兼ねた下男が1人の4人とした。生活に必要な費用が向こう持ちなので過度の負担をかけないようにするのと、自分は身分が低いので安心ですと言外にアピールするしているつもりだ。イザベラ姫が研究を見に来るのでそれなりに人を配置しようとも考えたが、宮殿の中であれば警備の人間も姫の侍女も一緒についてくるはずなのでこの人員はあくまで僕の身の回りを世話し貴族としての対面を保つのに必要な人数として配置した。

僕の王都行きが決定し諸々の準備が進む中、僕の誕生パーティーが行われその場で正式に発表された。王都に行く準備が終わったのはその月も終わりに近いティワズの週に入ってからだった。移動などを含め授業を開始するのは翌月のギューフの月に成ってからということで決った。

「イザベラ様お久しぶりです。本日より魔法の授業を受け持たせていただきます。また、他の授業では学友としてご一緒させていただく物もございますのでよろしくお願いいたします。」

「ええ、アルマンよく来たわね。あなたが先生の話を受けてくれて良かったわ。あなたの進めてくれた方法での練習を前の先生は全然取り合ってくれないし”自分のやり方より地方領主の息子が言ったやり方のほうが良いならその者に教えを請えばいい”とまで言われたのよ。

まあ、だからそのままそれを実行してやったの。」

”あなたの言う通りにさせて頂きます。あなたを解雇し、その地方領主の息子を雇うことにしますと言った時の驚いた顔は可笑しかったわ～”とすごい良い笑顔をしながら言ってこられて思わず頭を抱えたくなるのを必死で我慢した。

「それでアルマン、１人で【浮遊】練習を続けていたんだけど、持続時間は延びたんだけど静止させることがどうしても出来ないのよ如何すればよいかしら。」

「そうですね、まずは姫様の【浮遊】を見せていただいてからどのようにすれば考えましょう。いつも練習に使ってる目標物をイザベラ様の方の高さで出来るだけ動かないように維持してください。その様子を【探知】で拝見させていただきます。」

それを聞きイザベラ様は拳ほどの石に【浮遊】をかけて維持し始めた。維持できた時間は２０分、本人の言うとおり上下動が多く静止させることが出来てなかった。魔力の拡散を上手く感じれてないのだろう、魔力の拡散により石が下がり始めて維持の魔力を増やし、元の位置まで来ると一瞬止まるがまた下がるを繰り返していた。だが上に行き過ぎることが無いのでイメージの方は上手くできてると見て良いと思う。維持の仕方をつかむことが出来ればかなり細かい制御が出来るようになりそうだ。維持の時間も最初は5分だったそうで、２ヶ月で２０分まで伸びたのなら今後の伸びも十分期待できる。

「有難うございます。今の様子からすると休みながらならあと6回位同じことが出来るんじゃないですか？」

「判らないわ。今は魔法の練習時間は2時間と区切られているから出来るだけ維持して2時間の間に出来る回数だけやってるの。」

「なるほど、今の練習時間では限界ギリギリまでは練習が出来ないわけですね。あと確かに魔力のコントロールに難が有るようなので石の大きさをそのままでコントロールの練習を暫くして行きましょう。

まずは自分が【浮遊】を唱えますのでそれを【探知】で観察してください。自分と対象に流れる魔力を見ていただくことで魔力の流れのイメージを作っていただければと思います。」

「判ったわ」

「では行きます【浮遊】」「【探知】」

僕が魔法を発動させると同時に姫様も魔法を発動させる。姫様の【探知】が確り発動しているのを確認してから説明を始める。

「自分は【浮遊】の場合、対象を魔力で包み持ち上げるイメージで魔法を発動させています。そのとき対象を包んだ魔力は少しずつ拡散して減っていきます。魔法を維持する場合この拡散した魔力を対象に足すことで行います。」

見ててくださいといって、石に放出している魔力の量を増減させる。すると石は上下に動き始める。

「この様に放出する量が一定に成らないと石は上下してしまいます。そしてイメージが確りしている場合拡散量より多く魔力を放出しても石は目標の位置で静止できますが今度は早くに精神力が無くなり維持が出来なくなります。もちろんイメージが確りしてない場合は

高く浮かんでしまいます。姫様にも魔力を見ることが出来ましたでしょうか？」

「ええ、白い靄の様に見えるものが貴方や石を覆っているのが判るは、あと貴方の杖から石までもその靄が伸びているわね。」

「其れが魔力です。今度はご自身の手などを見ていただければ姫様の魔力も見ることが可能です。そのままご自身の魔力を杖の先に集める事は可能でしょうか」

「やってみるわ。」

自分の杖を見つめながら集中に入るイザベラ姫。

「あ！【探知】が切れてしまったわ。」

「やはりそうなりましたか。魔法の維持をしたまま、別途魔力を動かすのは慣れが必要ですから最初は大体そうなるそうです。」

ただこれが出来ると魔力のコントロールの練習が格段にしやすくなるので試しにやってもらったのだ。対処方法は考えて有るんだけど時間的に間に合わなかったのと金額的にちょっときついので後でジョセフ殿下に相談させていただこう。

「魔力が見えなくても幾らかは感じることが出来ていると思いますので、今のまま魔力のコントロールをして頂き自分が【探知】で確認しても練習は可能です。今はそれで練習をしていきましょう。」

「ねえ、【探知】を維持したまま魔力を動かす練習はしないの？」

「そちらのほうが難しいですから見ないままで練習してからのほうが良いでしょう。本当なら【探知】効果があるメガネなどを用意したかったのですがちょっと間に合いませんでした。」

「そう、そのマジックアイテムは家にあるかもしれないわ。調べて用意してみるわね。」

「お願いします。
では、続きをやりましょう。」

そうして自分が【探知】をかけて魔力を見つつ動かしてもらう。そして魔力をどう動かすかを指示していく。見えていないのでやりにくいだろうが姫様はがんばって練習を続けてくれた。休憩を挟みつつ2時間練習して今日の僕の授業は無事に終わった。

しかしその後の他の授業でちょっと問題があった。今日は自分の授業が一番最初であったが疲れすぎて他の授業でイザベラ姫が眠りそうになり怒られてしまったのだ。そのため明日行こう自分の授業はその日の最後に行われることになった。また、授業後に自分の魔法陣研究の視察にも来ることになってるので授業そのものを自分の研究スペースのほうで行うことになった。

第七話

最初の授業から2ヶ月たち年が変わりブリミル暦6233年ヤラの月を迎えた。両親がリュティスで行われる新年の祝賀パーティーに出席するため此方にくることになったので特に故郷へ帰ることなくリュティスで過ごすことになった。

僕の住んでいる場所はあくまで僕とその従者が暮らす場所なので父さん達を泊めることができるほど部屋数が多くないしプチ・トロワの敷地内に有る為おいそれと招くことが難しいので父さん達は今回も前に泊まった宿に泊まることになった。そして僕も父さん達のいる間はそちらに泊まることになった。今日父さん達がこっちに着いたので

「父上、母上、兄さん達もご無沙汰しております。」

「おお！アルマン久しぶりだな大過なく過ごしているようで何よりだ。」

「はい、宮殿の方々にも良くしていただけてますし、付いてきた者たちも良く働いてくれています。」

「そうか其れは良かった。」

「あなたが幾ら確りしていてもまだ子供ですから心配していたのですよ。」

そう言われて母さんに抱きしめられた。結構恥ずかしいのだがとりあえずされるが儘にした。

「アルマン久しぶりだな、少し背が伸びたか？」

「アルマン、こっちの流行について教えろよ。なにか面白いことは無いか？」

兄さん達も口々に聞いてくる。ユベール兄さんまで楽しそうに話しかけてきたのにはびっくりした。僕はユベール兄さんには嫌われてるか苦手に思われていると思っていたから今回のことは本当に予想外だった。

「アルマン？如何したのそんなびっくりした顔をして？」

「いえ、何でも有りません。背は変わってないと思いますよクレマン兄さん。ユベール兄さんすみません、僕は流行に疎いもので此方で何がはやってるか分らないです。たぶん、付いてきたセリア達のほうが詳しいと思いますよ。」

「折角リュティスにいるのに何やってるんだよアルマン！勿体無いじゃないか。」

「勿論仕事と魔法陣の研究ですよ、そのために僕は此方に呼ばれたのですから。毎日、充実していて直ぐに一日が終わってしまうので街のことには気が向いていませんでした。でもそうですね、折角リュティスに来ているのですからお休みの日ぐらい今度から街に出てみることにします。ユベール兄さん有難うございます。」

ユベール兄さんの言うこと一理ある、リュティスにはポー伯爵領に無いものが沢山あるのだし、研究に直接関係の無いものでも知っていれば新しいアイデアの元になるだろう。こっちに来てからプチ・

トロワと研究所の図書館位しか行動範囲が無かったが街の方にも出かける時間を作ってみることにしよう。

「それでどうだ姫様への授業は上手くいっているのか？」

「はい、そちらは問題ありません。姫様も頑張っていらっしゃいますし確実にコモン魔法のコントロールや威力は上がっていますので2・3年もすれば教師としての自分はお役御免になると思いますよ。自分の属性は土ですが姫様は水の属性ですから基礎が出来れば其方の教師が宛がわれるはずですから。」

「そうか、魔法陣の研究の方はどうだ？」

「そっちの方はまだまだです。研究所の図書館で色々な専門書を読めるようになりましたので今はそれらを読み漁っているところです。」

そう、此方に来て一番変わったのは今まで読みたくて読めなかった、マジックアイテム制作に関連する研究資料やルーンを研究した専門書籍を自由に読めるようになったことだ。いままで分らなかったことが分るようになると随分嬉しかったんだけど今度は資料が多すぎて知りたい内容にたどり着くのに時間がかかってるのが現状で実際に何かするより図書館の資料を読み漁り整理している所だったりする。

しかもあの図書館、本の分類・整理がまるで出鱈目で魔法の研究書の横に政治学の書籍が有ったり官能小説まで有ったりして、良くこれで利用者が本を見つけられると最初に来たときには不思議だったくらいだ。書籍の整理を行う司書のような職員は居るのだが本来は他の研究をしている研究員が兼務しているらしくて、どうも良く

貸し出される本だけを取りやすい本棚に集め他の本を適当に詰め込んでいるみたいで仕事がいい加減なのだ。仕方が無いので自分の資料を探す傍ら図書館の整理までしている。こんなことはほって置いて自分の研究をすればいいのだが何と無く我慢が出来ず本を整理してしまうのだ。

閑話休題

そんなわけで実際の研究に関してはこっちに来てからは手付かずになってたりする。

「魔法陣の研究に関して姫様にお見せする約束になっていましたが、その辺に関してはそんな現状ですので図書館から借りてきた本を一緒に読んだり、魔法を使わない理論の講義なんかを行ってますね。」

最初は図書館に行く日には魔法陣の研究の見学は無しとなっていたのだが、自分が頻繁に図書館に行くので最近では姫様も変装してお忍び図書館に行き本の整理を行っていたりする。流石にこの辺は父さんたちにも話すことが出来なかったりする。

そんな感じで近況を話しながら家族と新年の休暇をすごしまたプチ・トロワでの生活にもどった。

始祖ブリミルの降臨祭の終わった翌日僕はプチ・トロワでの日常を再開した。何時もの授業を受け今度は僕が先生になる時間が来た。

「アルマン何時も通りよろしくね。」

このところイザベラ姫は僕に対して随分砕けた態度をとるようになってきた。流石に他の授業ではそうでもないが余人の居なくなるこの時間はこんな感じだ。そして今日はそのイザベラ姫の後ろに何時もと違う人影があった。

「あの、イザベラ姫様後ろにいらっしゃる可愛らしいお嬢様はどなたですか？」

姫様のスカートの後ろから隠れるように顔を覗かせている青い髪の小さい少女は僕がそういうと顔を真っ赤にして後ろに隠れてしまう。まあ、ひょっとしなくてもこの容姿なら誰かは直ぐに分るが・・・

「この子は私の従姉妹のシャルロットよ。」

「シャルロット姫殿下、始めましてアルマン・ポーと申します。イザベラ姫殿下に魔法をお教えしています。よろしくお願いいたします。」

「シャルロット・エレーヌ・オルレアンです。」

真っ赤になりながらも姫様の後ろから出て挨拶してくれた。

「それでどうしてシャルロット姫殿下が此方に居られるのですか？」

まあ、当然の疑問だこれは聞いておかないといけない。

「ああ、アルマンが来てから魔法の授業や図書館の整理に夢中で今までシャルロットと遊んだりした時間もそれに当てたりする事が多かったから拗ねてしまってね。私と一緒に来ると言って聞かなかったのよ。他の先生の時間だと色々怒られると思ったけどアルマンなら大丈夫かなと思ったのよ。」

どうやらシャルロット姫の勉強の時間は全て終わっていてイザベラ姫と一緒に居ても問題は無いらしい。そして一緒に居ることが少なくなった原因の僕時間に一緒に居ることにして埋め合わせをすることにしたらしい。まあ、僕なら許可も取りやすかろうと思われているのも一因だと思う。実際ここでダメ出しが出来るほど僕の意思は強くなかったりするので見透かされているなぁと思い苦笑しながらもＯＫをだした。

「シャルロット姫様が此方にいらっしゃるのは構いませんが今日の魔法の練習は何時も通り行います。シャルロット姫様もイザベラ姫様の練習のお邪魔はしないとお約束ください。其れが出来ないようでしたら申し訳ないですが暫く別室でお待ちいただくことになります宜しいですね？」

「わかってる、私だって魔法は上手くなりたいからサボる心算は無いよ。シャルロットもいいね？練習の間は大人しく見ててね、途中に休憩もあるからその時は相手もするよ。」

「わかった！」

そういわれるとシャルロット姫様はぱあっと明るい笑顔を浮かべて頷いてきた。其処から後は何時もの練習風景と変わらなかった。シャルロット姫は約束通りイザベラ姫の隣に持ってきた椅子に座り大人しく練習を見ていたし、イザベラ姫も気を散らすことなく練習

に打ち込んでいた。練習も今やってる【浮遊】で終わりというところでセリアが僕の所に慌ててやって来た。

「シャルル・オルレアン公がお見えになっています。」

「え！そんな急に・・・・・・」

「どう致しましょ？どうもシャルロット姫殿下が此方に居ることを聞いていらしたようなのですが。」

「わかった、とりあえずお迎えに上がりましょう。姫殿下に急ぎの御用かも知れませんから。」

そんな事は無いだろうと思いつつもセリアを安心させるためにそう言っておく。イザベラ姫には急なお客様なので本日の練習は終了したい旨を伝え魔法を中断してもらって入り口近くの応接間へと挨拶に向かう。

「シャルル殿下お待たせして大変申し訳ございません。お初にお目にかかりますアルマン・ポーでございます。本日は急なお越しですが何かございましたでしょうか？」

「君が噂の天才少年かい。確かに確りしているようだね。はじめましてシャルル・オルレアンだよ。なに特に何が有った訳ではないよ、今日会談予定があった相手が天候不順で到着が明日以降に延びてね時間が出来たのでシャルロットと過ごそうと思ってね。そうしたらイザベラと一緒に居ると聞いてね此処まで来たんだよ。」

「そうでしたか、そういうことでしたら奥の間で今休憩をされていますのでお呼びいたしますね。」

「いや、イザベラの練習風景も見てみたいし僕の方から行くよ。」
「本日の練習は終わった所ですので練習をご覧いただくことは出来ませんが宜しいですか？」
「いいよ、行って戻ってくるのも手間だし奥に僕が行っても問題は無いのだろ？」
「はい、ではご案内いたします。」

「此方になりますお入りください。」
練習をしている奥の部屋に案内して扉を開けてシャルル殿下を中へと促す。
「あ！お父様だ！」
シャルロット姫がいち早く気が付き殿下へと飛びついてきた。
「おっと、うちの姫殿下はお転婆だな。あははは」
「シャルル叔父様この様な場所にどうして？」
「ああ、予定していたお客様が来れなくなって時間が空いてね折角なのでシャルロットと過ごそうと思って探したんだよ。」
「ごめんなさい、私が連れまわしてしまって。」

「いいよ、シャルロットが我侭を言ったんだろ。」

「違うもん、私、我侭言ってないもん！」

シャルロット姫が抗議の声を上げるがシャルル殿下は笑って受け流していた。

「それで、これからは如何する予定なのかな？」

「本来なら魔法研究所の図書館に行って文献の整理を行いますが今日はシャルロット姫殿下がいらっしゃいますので姫殿下に喜んでいただけるような本をお読みしようかと考えておりました。」

「図書館の整理？あそこの整理は行われているのではないのかい？」

心底不思議そうに聞かれたので図書館の現状を話し資料を探すために本の目録を作りながら整理を行ってることを説明した。

「其れは研究所の所員仕事ではないのかい？兄さんには言ったんだろ何か言ってなかったかい？」

「それについては何も、特に作業をしないようにとは仰ってませんでした。たぶん現状で整理に人が当てられていないのは予算配分の関係もあるのでしょう、僕が資料を探しながら整理を行えば其処に賃金は発生しませんし所員からも特に反発は起きて所か便利がられて居るなら一石三鳥ですのでほおっていらっしゃるのでしょう。」

僕のその言葉を聴いてシャルル殿下は何かを考えているようだった。ここに現れたこともそうだが何かありそうな感じがして話題を

変えることにした。

「とりあえず今日に関しては『イーヴァルディの勇者』をお読みいたしましょうか。」

「アルマン、それなら朗読は私がやるわ。あなたはゴーレムを使ってそれに併せた劇をやってよ。前に見せてもらったの。」

「アレですね分りました。」

ゴーレムを使った劇をするならここでは無理なのでテラスに向かい僕だけ庭に出る。其処に連金で土の壁を出し演台を作り３０サントくらいの人型のゴーレムを作った。イザベラ姫は幼いながらも確りした声で『イーヴァルディの勇者』を読み上げてゆく。

イーヴァルディは竜の住む洞窟までやってきました。
従者や仲間達は、入り口でおびえ始めました。

猟師の一人が、イーヴァルディに言いました。
「引き返そう。竜を起こしたら、俺たちみんなしんでしまうぞ。
お前は竜の怖さをしらないのだ。」

イーヴァルディは言いました。
「ぼくだって怖いさ。でも、怖さにまけたらぼくはぼくじゃなくなる。
そのほうが、竜に噛み殺される何倍も怖いのさ」

少女の姿をしたゴーレムが竜に攫われ、剣を持った少年は大きな竜と対峙し激しい剣戟を、竜は口からはブレスを吐き少年と戦った。

どう！と音を立てて竜は地面に倒れました。
イーヴァルディは、倒れた竜の奥の部屋へと向かいました。
そこには、ルーが膝を抱えて震えていました。

「もう大丈夫だよ」

イーヴァルディはルーに手を差し伸べました。

「竜はやっつけた。きみは自由だ。」

イザベラ姫が其処まで読んで物語は終わった。少年と少女のゴーレムは演台の向こうへと手をつなぎ歩き消えていく。

パチパチパチとしきりに拍手をして飛び跳ね喜ぶシャルロット姫を見てとりあえず上手くいった事はわかった。

「すごい！すごい！もっと、もっとない？」

興奮するシャルロット姫に「今日は終わりです。」と言い不満そうにしているのを「私のところですとこういったご本はもう無いものですから。」となだめる。また機会があったらと約束してとりあえず我慢をしていただいた。その後はイザベラ姫とシャルロット姫の話を聞き相槌を打ちながら時間をすごし二人は帰っていった。その間シャルル殿下も一緒に歓談しシャルロット姫を膝に乗せたりして可愛がっていた。

二人が帰った後にシャルル殿下は少し僕に話しがあるといって残っていた。

「たいしたものだね。」

「えーと、あの人形劇の事でしょうか？」

「其れも有るけど、イザベラ姫の事だよ。あの魔法の苦手だった姪姫が君が来てから期間だけで本を読みながら【浮遊】を使えるようになるとは凄い指導力だと思ってね。」

「ああ、アレは私の指導では無ございません。研究所の図書館を整理しているうちに自然と本を読みながら【浮遊】を使われるようになっていたのです。」

「自分で覚えたと？」

「はい。」

実際本を読みながら【浮遊】を使うのは慣れてくれば誰でも使える。高い書架の上の本を【浮遊】で浮かんで取りそのまま読んで戻すなんて事は頻繁に行われていることである。イザベラ姫は出力が足らず自分を高いところまで持ち上がられないので仕分けした本を【浮遊】で棚に戻しながら他の本の中身を確認したりしている。そんな感じに覚えたものなのだ。もっとも今回のは本を読みながらでは詠唱が出来ないのであらかじめ【浮遊】の魔法陣を仕込んだ杖で魔法を発動させていたことも教える。

物としてはそのままで、フライボード魔法陣を【浮遊】に変えたものと風石を金属球の中に入れて短杖（ワンド）の先につけた物だ。使い方はフライボード同じで魔力を通してイメージを魔法陣に伝えれば【浮遊】が発動する。

イザベラ姫は今回は本を読みながらなので呪文を詠唱できないのでこの杖を使ったが通常の杖でも本を読みながらの【浮遊】の発動は出来る様にはなっている。

「これも君が発明したんだったね。」

「はい、もともと魔法陣其の物はフライボードの前に出来てましたから其れを杖に封じただけですが。」

なのでこの杖其の物は大した物ではない。一応作ったときに王家に対しても献上しているので殿下も知っているんだろう。

「それで本題なんだが、家のシャルロットにも魔法を教えてもらえないだろうか？」

「シャルロット姫殿下の魔法をですか。どうしてでしょう？才能もお有りで特に問題なく習得されてるとお聞きしていますが。」

「あれはイザベラ姫に良く懐いているから長期間会えないとごねる事が多くてね。他の授業では教える内容が違いすぎるので無理だが魔法なら其れも有る程度何とかなるだろう？」

またイザベラ姫が教師を変える前とは見違えるほど魔法に取り組むようになったので其れに肖りたいんだそうだ。それと俺の派閥への取り込みの布石かな等と考えながら説明を聞いていた。

「すると魔法の教師に何か問題が有って変えたいという訳では無いのですね？でしたらお受けできません。」

「私の依頼は聞くことが出来ないと言う事かね？」

「いえ、まず何の落ち度もない方の職を姫の我侭を宥めるために解くのは殿下や姫のご評判のためによくないのが一つ、私が技量として一度に御二方の魔法の授業をする自信が二つ、ごねれば言うことを聞いてもらえる姫様が思いかねないので教育上も宜しくないのが三つ。以上の理由からこの件はお受けできないのです。」

それにシャルロット姫の才能が話しに聞くとおりなら直ぐにコモン魔法を覚え系統魔法の練習に入るので自分が教えられる期間が非常に短いだろうと推察できるのも理由の一つだ。結局直ぐに一緒に魔法を教えることは出来なくなるのだから余り意味が無いのだ。この話をすると殿下は顎に手を当てて少し思案しているようだった。俺としては王家に取り入る新興勢力として目を付けられるのを避けたいので断りたいところだがたぶん逃がしてくれないだろう。

「確かに君の言うとおりだな、では魔法の時間の後君の研究の時間にシャルロットも見学に来させるというのは問題があるかい？」

「姫殿下の研究所や行き帰りの警備等が整えば私はいらっしゃるのをお断りすることは出来ません。イザベラ姫殿下は身分を隠して研究所に行っておりますのでその辺を上手く手配していただきたくお願い申し上げます。」

「ああ分ったよ。その辺は上手く手配しよう。」

そう言ってシャルル殿下は席を立ち自分の宮殿へと帰っていった。

図らずもイザベラ姫とシャルロット姫の2人の姫と多くの時間を過ごすことになってしまった。僕としては研究だけを考えて暮らしたいけどドンドンそうはいかなくなって来ている。世の中上手くいかないのだ。

第七話（後書き）

お読みいただきありがとうございました。
かなり難産でした。
シャルルの話し方や主人公の受け答えの敬語に変な所があったらご指摘ください。

シャルロットもう暫く絡めないようにしたかったんですがシャルルの提案を断る言い訳が思いつかなかったのでこんな形に・・・

次回も読んでいただけると嬉しいです。

第八話

シャルロット姫が研究の時間に見学に来るようになってから2年僕が心配したような他家からの圧力なども無く平穏に過ごすことが出来た。研究所の図書館に関してはやっと3割程度の整理しか出来てない。この2年の間でお転婆だったシャルロット姫は本を読むことが趣味になり図書館の整理中仕分けをしないで本に夢中になっていることが多かった。特に気象や生物の生態など自然科学系の書籍に大変興味を示しておりもう暫くして此方の手が空くようになったら頭の中にある科学知識を本にしてプレゼントするのも良いかも知れない。対してイザベラ姫は作業をやっている時に本を読みふけることは無いが作業中に見つけた本を借りて時間を見つけて読んでいるようだ。傾向としては魔法具の制作や過去の魔法具に関する本が多い。あとどちらの姫も時々出てくる英雄譚など物語も借りて読んでいるようだった。

しかし【念動】のルーンに関しての記述は一向に出てくる気配が無いので研究は停滞したままだ。まあそう簡単に出てくるものでも無いのかも知れないが姫様に魔法を教える必要が無くなれば此処を出てゆくことになりこの研究所にも来れなくなるので焦りも出てくる。

イザベラ姫の魔法の練習は制御の面で見れば順調だが出力の面で伸びなくなってきていてコモンでは問題ないがドットとはいえ系統魔法を使うには不安が残る状態になっている。魔法を使うためMブレイン長時間稼動させることは出来るのに、粒子論理回路を一度に扱える量があまり増えてかないのだ。このため魔法を発動させるのに必要な情報制御が確実に行えず魔法が失敗している。それでも文

句も言わずに僕を信じて練習を続けてくれているので何とかしてあげたいと思っている。

それから姫様の勉強に女性のたしなみとしての楽器や刺繍などの授業が入るようになった。そう言った時間には僕の方は戦闘訓練をやるように指示がきた。最初は基礎体力の増強と杖剣の素振りなどだけだったが最近は僕ぐらいの歳の頃の騎士見習いの少年に混じって試合のような事もやるようになってきている。僕の杖は普通のタクトの様な杖だったのだが、これに合わせて杖剣も契約をさせられた。ジョセフ殿下の指示らしい、ここに来る前に考えていた通り僕が姫の魔法の教師役から外れても何らかの理由をつけて近くに置こうとしているのが濃厚になってきている。しかも、シャルロット姫の件から後シャルル殿下も何かと理由を付けては僕の所に来るようになってるので継承権争いの渦中に片足突っ込んでる状態になっている。これで他家からの嫌がらせが来ないのが不思議なくらいだ。

「さてベラもシャルもいつも通り本の整理をよろしくね。今日は此処から此処までをやる予定だよ」

この図書館に来てるときは二人の姫様は下級貴族の子供となっている。僕の家の家臣団の娘を従者代わりにしているという触れ込みだ。お忍びで来ているが見えないところで警備騎士が警護をしている。なので此処では彼女達に敬語を使わずに話しかけている。

「わかったよアルマン。ドンドン片付けちまおう」

「うん、わかったよ」

どうもイザベラ様はこの図書館の職員たちとも仲良くなっているようでドンドン言葉遣いが悪くなっていっている。一応公の場などではちゃんとしているのだが僕たちだけに成ると途端に口が悪くなるのである。最初は注意していたのだが今は年頃になれば直るかと思い特に注意をしなくなった。諦めたともいう。

各自で本をざっと読んで分類分けをして、それぞれ分けたエリアに本運んでいく。二人とも仲良く本を運んでいく。結構本は重いので【浮遊】を使って運んでいる。これも魔法の練習にしている。

「ブリミル暦１５１０年公事記とこれはまた随分古い記録書が出てきたな」

「アルマン、其れは歴史書かい？」

「ああ、約４７００年前の王家主催の行事について記録みたいだね。この辺に幾つか近い時代のものが固まって有るよ」

見ると同じ様な装丁の本が散見できる。それらの本を確認しつつ集めてイザベラ姫に渡していく。そうやって本を抜き出していると隣の本が引きずられて棚から落ちてしまった。それは黒い革の表紙で何の飾りもタイトルも無い本だったので確認のために読んでみた。どうも当時の王様の手記が混じっていたようだしかも開けたページにはある儀式を行ったことに関する感想が書かれていた。

「・・・・・あー、これはちょっと後回し」

「アルマン其れは如何するの？」

それに気が付いてシャルロット姫が聞いてきた。

「これは個人の日記の様なんですよ。たぶん間違ってまぎれてそのままになった物でしょう。もういらっしゃらない方とはいえ個人の日記を読むのは良いことでは無いですし、此処の蔵書とするのも問題が有りそうなので後で如何するか決める事にします」

ちょっと内容が内容なのでイザベラ姫やシャルロット姫には話せないので適当に誤魔化しておく。それからは特に何事も無く（と言ってもシャルロット姫が興味のある本を見つけて読みふけりだしたり、出てきた官能小説にイザベラが真っ赤になっていたりなど、いつものハプニングは有ったが）今日のノルマとした範囲の整理は終わった。

「今日は此処までだね」

「疲れたわ、アルマン貴方の所でお茶を出しなさいよ」

「私もお菓子食べたい～」

「分りました、セリアに何か用意して置くように言って出てきましたので帰れば用意が出来てる思いますよ」

「やった～セリアのお菓子美味しいから好き～」

そう話しながら帰りの帰り支度をして図書館を出ることにする。例の本は他の本と一緒に持ち出す。姫様たちは今日は特に持ち出す本は無かったのか手ぶらで帰るようだ。宮殿の離れに戻りお菓子を食べながら少し他愛も無い話をして二人の姫様は自分の部屋へと帰っていった。

夕食の後、僕は自分の部屋に戻ると図書館から持ち出した例の日記を取り出し中身を確認していく。二人にはああ言ったが此れの持ち主が誰で有るのかと例の儀式がどのような物かを確り確認する。其処に書かれた内容は僕が原作を読んで感じていた疑問を埋める内容だった。ただこの日記を誰に渡すかが問題になる。ジョセフ殿下に渡そうがシャルル殿下に渡そうが儀式を実際にやってしまえば結果は見えてくる。そうかどっちに渡してもジョセフ殿下が国王になるのは変わらないじゃないか、まあ、原作通りなら渡さなくてもジョセフ殿下が国王になるのは変わらないけどシャルル殿下の死ぬことになる。ならば渡してジョセフ殿下が虚無だと知られればシャルル殿下も他の家臣たちも文句の付け所がなくなり王家のごたごたは起こらないで終わるはずだ。僕の予想通りならこの日記が原作から離れる大きな分岐点になるはずだ。

「要は僕の覚悟の問題か・・・」

これを渡すことで政治に深く関わる覚悟、実家を巻き込んでしまう覚悟か・・・って、これを渡してもどうして古い儀式が判ったのか発表されなければ他家からの圧力なんかは発生しないか。そんなに上手く行くとも思えないけど渡さない選択肢は選びたくないんだから覚悟を決めよう。まずは父さんに手紙を出して話を通してからジョセフ殿下にこの日記を渡そう。

手紙を書いて僕は隣の控えの間に居るセリアに声をかけた。

「セリア居るかい？」

「はい、アルマン様」

直ぐにセリアは部屋に入ってくる。

「この手紙をギーに言って今から梟便で父上に送ってくれないか。急ぎの手紙なんだ」

「分りました、直ぐに行かせます」

セリアはそう言って僕から手紙を受け取ると直ぐに部屋を出て行った。ギーは御者として一緒に来た使用人だ馬車を使えばそんなにかからず梟便屋にいけるだろう。そんな事を考えていたら直ぐにセリアが戻ってきた幾分慌てているようだった。

「アルマン様お客様です」

「えーと、誰か大変なお客様かな？」

「はい、ジョセフ殿下です」

「分かった、応接室にご案内差し上げたんだよね？」

「はい」

それから少し考える振りをしてIブレインの能力を使う。周辺の人や動物の動きなどを確認すると供にシャルル殿下の宮殿様子も確認する。たぶんこっちに向かってきているんだろう殿下を乗せた馬車が走ってくるのが分かった。

「直ぐに向かうようにします。それとお茶の用意をおねがい。それともしかしたら他にも大変なお客様がいらっしゃるかもしれないからその心算でいて。もしいらしたらそのまま応接室にお通ししてい

いです」

「もうお1人ですか？何かご予定がお有りなのでしょうか？」

「いや、ジョセフ殿下がいらしたならもう1人の殿下もいらっしゃる可能性があるかなと思って」

それを聞いてセリアは引きつった顔をしてからお辞儀をしてお茶の用意をしに出て行った。それを見送ってから僕は件の日記を一旦机の引き出しに仕舞い【鍵掛け】をかけて応接室に向かった。しかし、今日のうちに来るとは思わなかった。姫が話しているとはいえ日記を見つけた話だけでどうしてやって来る気になったのか気になるところだ。出来れば見せるもしくは知らせる前に父さんに話は通しておきたかったがしかたがない。

「ジョセフ殿下お待たせいたしました」

「いや、いきなり来て悪かったな」

「それでどのようなご用件でいらしたのでしょうか？」

「なに、イザベラが今日お前の様子が変だった言っていたので気になって来てみたのだ」

「そのような事でお越しいただけるとは身に余る光栄です」

「なに、イザベラの魔法の教師が心此処にあらずでは困るのでな、それに異様に緊張した様子で今日見つけた古い日記を扱っていたと言っていたのも気にかかってな」

あ～、そんなにしぐさや表情に出ていたのだろうか？普段と同じ様に行動していたと思うんだけど。

「気にするな、アレが人一倍お前を気にしているだけだ。周りの護衛はお前に変わった所はなかったと言っていたぞ」

「えーと、今の自分の考えは表に出ていましたでしょうか？」

「少し表情に影が見えたな、なかなかに表情が読み辛くなってきたが注意していれば分かるな」

前よりはマシになったということなんだろう、権力争いの中に身を浸けることにつながるようで嫌だがどっちにしろ少しはこういったことが出来ないと生きていくのが難しい貴族社会（世界）に居るのだから上達したことを喜んでおこう。

「そうですか、見つけた日記ですが自室に置いておりますので取ってまいりますからお待ちください」

「ほう、持って来てなかったのか。お前の事だから私の用件を理解して持ってやって来ると思っていたが」

「ご用件はある程度予想できましたが、もし違う御用事の場合には置き場に困ってしまいますから持ってまいりませんでした。」

そうして席を立ち一礼してから自室に戻った。そこでもう一度Ｉブレインを起動してシャルル殿下の馬車を確認した。プチ・トロワへ続く道を走っていた、もう暫くしたら正門に着きそうだ。あの様子なら１０分もせずに此処に着くだろう。出来れば到着を待って二人に同時に見せたいが如何したらいいだろう？

そんな事を考えながら仕舞った引き出しから日記を取り出し少しゆっくりと応接室に戻った。

「こちらが件の日記になります」

そう言って黒い表紙の本を応接机の上に置いた。

「ジョセフ殿下これをお読みになるのを少し待っていただけないですか？」

「構わぬが何か有るのか？」

「たぶんシャルル殿下ももう少しでいらっしゃると思いますので一緒に読まれるのが宜しいかと思います」

「なぜそういいきれる？」

「【遠見】の魔法を使いました。ジョセフ殿下がいらっしゃったならシャルル殿下もいらっしゃるかと思い確認してみたのですがプチ・トロワの正門辺りをシャルル殿下の御家紋の入った馬車が走っておりました。」

嘘ではない、Ｉブレインの能力も”魔法”なのだから只系統魔法でないだけだ。

「お前は土のトライアングルだろう、風のトライアングルスペルの【遠見】が使えるのか？」

「はい、あの魔法だけは使えます。もっともそう遠くまでは見えませんし時間も僅かしか使えないのでほとんど使いませんが」

「まあ、そういうことにしておいてやろう」

やっぱり誤魔化せないか、でもとりあえず不問にしてくれるらしい。

コン、コン

扉がノックされセリアがシャルル殿下の到着を知らせてきたのでそのまま入っていただく。

「シャルル殿下いらっしゃいませ」

「アルマン君、夜分にすまないね何か変わったものを見つけたんだって？それで気になって来てみたんだ。

兄さんも同じ理由かな？」

「ああ、シャルル。イザベラがなアルマンの様子が変だ変だと煩くてな気になって来てみたのだ」

「お二方にお気に掛けていただけて身に余る光栄です。シャルル殿下お手を煩わせて申し訳ございませんが【探知】【消音】【障壁】の魔法を掛けて頂けないでしょうか」

厳重に魔法による諜報への対策をお願いするとシャルル殿下は少し驚いたようで

「そんなに大変な内容なのかい？」

と聞いてきた。

「この部屋にはそう言った守りは有りませんし。この内容がそこまで重要で有るか無いかの判断は王家の方で無いと出来ないと思っています。お話してから重要だったと成るのは避けたいですから」

「分かったよ。」

そう言ってシャルル殿下は魔法を掛けてくれた。

「ジョセフ殿下にお見せしようとしているところにシャルル殿下がいらしたので丁度良かったです。この本が私が本日見つけた物です。これは約４７００年前のガリア王の手記でした。そこにある儀式に関する記述が書かれていたのです」

そうして二人にそのページを開けて見せた。

ハガルの月　ヘイムダルの週　ユルの曜日

俺は父王に呼ばれ王宮の奥、宝物殿の隠し部屋と足を踏み入れた。

そこには始祖の秘宝”始祖の香炉”と”土のルビー”が収められ

ている所で普段足を踏み入れることが許されていない場所

だった。

そして父は俺にルビーを嵌め香炉に触れるように言ってきた。

可笑しな儀式だと思ったがこの儀式により継承権代3位の俺が王位を継ぐことが決ったのだ。

父王は儀式について話すのを禁じてきた。また兄二人については

この儀式の事を魔法で忘れさせているとも言っていた。この王位

選定の儀式は口伝でのみ行い、立太子されたもの以外は全て忘れ

させることになっているのだ。

だが俺はこの思いを何処かに打ち明けず居られないのでこの日記

にしるす事でその代わりとしよう今日俺は虚無に目覚めたと・・・

日記にはこの後も色々な思いが書かれていたがそんなに重要なこ

とは書かれていない。この日記には虚無の魔法でこのページを認識できないようにするとも書かれていたが魔法の効果が切れたのか、僕はこうして読んでいるし二人の王子も読んでいる。

「たぶんこの儀式はどこかの代の王様が早世されて継承されなくなったのだと思います。虚無の使い手はこの儀式を行って初めて呪文を得ることが出来るのではないかと思います。なので虚無魔法が失われて久しいのではないでしょうか」

「これはなんというか・・・」

シャルル殿下は絶句したあと考え込んでいる。

そしてジョセフ殿下は食い入るように日記を見つめているだけだった。

第八話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

今回出てきた【障壁】はオリジナルの魔法で【遠見】の魔法を阻害する魔法です。

何とか月1回の更新には間に合いました。

次回はもっと早く投稿できるようにがんばります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1337q/

ゼロの使い魔―蒼の魔法陣―

2011年4月30日21時40分発行